愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第34巻　27～58　1988

残酷な場面を中心にした原話と改話の物語理解とイメージに関する比較研究

佐　藤　公　代
（教育心理学研究室）
（昭和62年10月12日受理）

Ⅰ　問　題

今回は佐藤公代（1987）の問題提起からはずれた課題についてまとめることにする。

児童文学の重要な一部分として，民話，伝説があげられ，子どもの読み物として，再話の問題の一つとしての残酷性がとりあげられる。それは教育的配慮によって，たとえば，日本の昔話として「かちかち山」では，おばあさんが殺されず，たぬきもおぼれ死なず，「舌切りすずめ」では，すずめが舌を切られない。イギリスの民話として，「三びきのこぶた」にしても，こぶたは三びきとも死なず，おおかみはやっつけられても生きている。その本来の話は，二ひきのこぶたはおおかみに食べられ，おおかみも三番目のこぶたにえんとつから鍋の中へ落とされて，ことこと煮て食べられてしまうのであるが，あまりに残酷すぎて改話になってしまうのであろう。

滝沢武久（1984）は，「すずめの仇討ち」の民話を，小学５年生に，そのまま聞かせた原話群と，話の残酷性を和らげた改話群とを比較し，感動の違いについてのイメージ評定を行った。その結果，原話群が登場人物の個性を明確にとらえ，話の進行に伴って，イメージの変化や感動が大きかった。また，水野陽一，飯田和也（1980，1981）は，「三びきのこぶた」の物語の結末部で，おおかみが熱い鍋の中に落ちて煮られて，こぶたに食べられてしまうという原話にそって描かれた絵本を幼児とその母親・大学生に見せたところ，母親と大学生は，残酷で幼児に不向きとする者が多かった。そして，大学生と母親は「おおかみは煮られて食べられる」「おおかみはやけどをして死ぬ」というより「おおかみは逃げていく」という結末を好んでおり，逆に，幼児は「おおかみが食べられるところが面白い」「おおかみが死んだのが面白い。食べてしまえばいいのに」「おおかみがやさしくなったのがいい。死んだ方がいい」という特殊反応を示した。

以上のことから，大人が子ども向けにと考える中身と子どもが楽しむ物語とには大きなずれがみられると思われる。本論は武沢，水野，飯田の研究を参考にして，年齢の変化，指標のとらえ方を考慮して行った研究である。

Ⅱ　目　的

残酷な場面の有無による原話と改話の比較により，物語理解，イメージ，心情，感想に対する影響や年齢変化を調べる。

仮説は次の通りである。

① 一番目と二番目のこぶたもおおかみも逃げる話を知っている者が一番多いであろう。

② 理解テストにおいて，年齢の高まりと共に平均得点は高くなり，Ⅰ群（改話，逃げる話）

よりⅡ群（改話，死ぬ話），Ⅲ群（原話）の方が平均得点が高くなるであろう。
③　心情テストでも，Ⅰ群よりⅡ，Ⅲ群の方が明確なとらえ方をされるであろう。
④　登場者のイメージは各条件の話の影響を受けるであろう。
⑤　感想においても，各条件の話の影響を受け，年齢の高まりと共に残酷な場面に対する拒否反応が強くなり，大学生がすすめる話は，Ⅲ群（原話）＜Ⅱ群（改話，死ぬ話）＜Ⅰ群（改話，逃げる話）の順に高くなるであろう。

Ⅲ　方　法

1)　被験者：E幼稚園，3歳児，34名，4歳児，34名，5歳児，51名，計119名。F小学校，1年生，30名，3年生，36名，5年生，36名，計102名。E大学生，計176名。
Table　1に各条件における人数を示す。

Table 1　各条件における人数（人）

年齢＼条件	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
3　歳　児	13	12	9	34
4　歳　児	10	12	12	34
5　歳　児	17	19	15	51
小　　一	10	10	10	30
小　　三	11	12	13	36
小　　五	12	13	11	36
大　学　生	60	57	57	176
計	133	135	129	397

2)　期間：1986年10月下旬～11月下旬
3)　材料：イギリス民話の「三びきのこぶた」（瀬田貞二訳，山田三郎画）を原話とし，改話としては，一番目と二番目のこぶたとおおかみの結末の一部を変えた。
各条件の物語の中で内容の異なる部分を示す。
①　一番目と二番目のこぶたの場面
(a)　原　　話
ふうふうのふうっと，家をふきとばして，こぶたを食べてしまいました。
(b)　改　　話
ふうふうのふうっと，家をふきとばしてしまいました。こぶたはびっくりして，急いで逃げていきました。
②　最後の場面
(a)　原　　話
そこで，こぶたは，すぐさまさっと，ふたをかぶせ，おおかみを，ことこと煮て，晩ごはんに食べてしまいました。それから先．こぶたはずっとしあわせに暮らしました。
(b)　改 話 (i)
そこで，こぶたは，すぐさまさっと，ふたをかぶせたので，おおかみは死んでしまいました。それから先，こぶたはずっとしあわせに暮らしました。

(C) 改　話 (ii)

「あちちち…」おおかみは，おおやけどをして逃げていきました。それからおおかみは，二度とやってこなくなりました。しばらくすると，一番目と二番目のこぶたも三番目のこぶたの家にやってきました。「ねえ，ぼくたちもこの家に住んでいいかい。」「いいとも。一緒に暮らそう。」それから先，三びきのこぶたはずっと幸せに暮らしました。

以上のことより，A，原話，B，①の場面は原話で②の場面は改話(i)である物語，C，①の場面は改話で②の場面は改話(ii)である物語の3通りの物語を用意して，幼児には，絵本を用いて読み聞かせ，小学1，3年生には，A3版の大きさで絵本と同様の絵を用意し，テープレコーダーを使った紙芝居形式とし，小学5年生と大学生に対しては漢字かな混り文にしたプリントに絵本の絵の一部を挿絵として松尾香代子氏が作成したものである。

事前調査として，先行情報の影響を考え，「三びきのこぶた」について既知の有無を確かめた後，既知の話のあらすじを質問し，その話についてどのように思ったかを質問する。その後，

〔1〕 理解テスト

物語の各部位に対応させた9つの問題を作成し，各質問に対して筆答（幼児に対しては口頭）と誘導質問を求める。理解テストは次の通りである。

1. 三びきのこぶたがおかあさんぶたと別れたのはどうしてでしたか。（①びんぼうだったから，②一人でくらそうと思ったから）
2. 一番目のこぶたは何を使って家をたてましたか。（①木の枝，②れんが，③わら）
3. 二番目のこぶたは何を使って家をたてましたか。（①木の枝，②れんが，③わら）
4. 三番目のこぶたは何を使って家をたてましたか。（①木の枝，②れんが，③わら）
5. 一番目と二番目のこぶたはおおかみが来た後，どうなりましたか。（①びっくりしてにげていった。②おおかみに食べられた）
6. おおかみは三番目のこぶたをつかまえるために，最初，何と言ってこぶたを誘いましたか。（①おまつりに行かないか。②かぶをとりに行こうよ。③りんごをとってあげるよ）
7. 二回目は何と言って，こぶたを誘いましたか。（①おまつりに行かないか。②かぶをとりに行こうよ。③りんごをとってあげるよ）
8. 三回目は何と言って，こぶたを誘いましたか。（おまつりに行かないか。②かぶをとりに行こうよ。③りんごをとってあげるよ）
9. おおかみは最後にどうなりましたか。（①こぶたに食べられた。②なべの中に落ちて死んだ。③おおやけどをしてにげていった）

〔2〕 心情テスト

物語の各部位に対応させた6つの問題を作成し，各問題に対して筆答（幼児に対して口頭）を求め，幼児に対して，無答の場合，誘導質問を行う。問題は次の通りである。

1. おおかみとの約束を守らなかったこぶたは，どんな気持ちだったと思いますか。（①こわかったですか。②気持ちよかったですか）
2. 約束を破られたおおかみは，どんな気持ちだったと思いますか。（①悲しかったですか，②腹が立ったですか）
3. 一番目のこぶたは食べられた（逃げた）時，どんな気持ちだったと思いますか。（①こわかったですか。②悲しかったですか）

4.　二番目のこぶたは食べられた（逃げた）時，どんな気持ちだったと思いますか。（①こわかったですか。②悲しかったですか）
5.　おおかみを食べた（が死んだ，逃げた）時，こぶたはどんな気持ちだったと思いますか。（①悲しかったですか。②うれしかったですか）
6.　その時，おおかみはどんな気持ちだったと思いますか。（①悲しかったですか。②腹が立ったですか）
〔3〕　イメージテスト
幼児と小学生には11，大学生には19の評定尺度を用いる。幼児と小学１年生は３段階評定，小学３，５年生，大学生は５段階評定とする。評定する登場者は，一番目のこぶた，二番目のこぶた，三番目のこぶた，おおかみの４つである。評定尺度は佐藤（1986）と滝沢（1984）のを参考にして，物語に合うものを加える。幼児と小学生の評定尺度は，大学生の評定尺度の中から理解しにくいものを省略し，表現もわかり易くする。尺度の左右，順序はランダムである。以下に評定尺度を示す。
＜幼児，小学生。＞
明るい―暗い，おもしろい―つまらない，強い―弱い，小さい―大きい，好き―きらい，こわい―やさしい，りこうでない―りこうな，よい―悪い，正しい―まちがった，かわいそうな―かわいそうでない，働き者―なまけ者。
＜大学生＞
明るい―暗い，強い―弱い，おもしろい―つまらない，小さい―大きい，静かな―騒がしい，好き―嫌い，重い―軽い，恐い―優しい，上品な―下品な，愚かな―利口な，冷たい―温かい，美しい―醜い，よい―悪い，正しい―間違った，やわらかい―かたい，はやい―おそい，鋭い―鈍い，かわいそう―かわいそうでない，働き者―怠け者
〔4〕　感　　想
残酷場面の有無による影響をみるため，幼児には３問，小学生には４問，大学生には５問作成する。問題は次の通りである。
1.　おもしろかったですか。
おもしろかった人…どこが一番おもしろかったですか。
2.　あなたが三番目のこぶたなら，おおかみをどうしたいですか。
3.　「三びきのこぶた」を知っていた人は，それと比べてどのように思いましたか。（小学生，大学生）
4.　お話の中で誰が一番好きですか。（園児，小学生）
5.　子どもにこの話を与えることについてどう思いますか。（大学生）
①与えた方がよい。②どちらともいえない。③与えない方がよい。
4)　手続き：事前調査として物語を与える前に「三びきのこぶた」を知っているか，知っているならばどのような内容のものを知っているかなどを調べる。その後，各年齢，各条件に応じた物語を与えてから，残酷な場面の有無による理解度，登場人物の心情理解とイメージ，感想を求める。
5)　条件群：性別を考慮して３グループにする。
Ⅰ群…一番目と二番目のこぶたもおおかみも逃げる改話を与える群
Ⅱ群…一番目と二番目のこぶたはおおかみに食べられ，おおかみは死ぬ改話を与える群

Table. 2　各年齢，各条件における事前調査の結果（人数）
（但し，大学生は延べ人数）

年齢	条件＼内容	A	A′	B	B′	C	C′	その他あまり覚えていない	知らない
3歳児	Ⅰ	0(0.0)	1(7.7)	0(0.0)	0(0.0)	1(7.7)	1(7.7)	6(46.1)	4(30.8)
	Ⅱ	1(8.3)	1(8.3)	1(8.3)	0(0.0)	1(8.3)	0(0.0)	7(58.5)	1(8.3)
	Ⅲ	2(22.2)	0(0.0)	1(11.1)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(44.5)	2(22.2)
4歳児	Ⅰ	2(20.0)	0(0.0)	2(20.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(10.0)	5(50.0)
	Ⅱ	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(16.7)	0(0.0)	0(0.0)	3(25.0)	7(58.3)
	Ⅲ	2(16.7)	1(8.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(25.0)	6(50.0)
5歳児	Ⅰ	6(35.3)	0(0.0)	1(5.9)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	5(29.4)	5(29.4)
	Ⅱ	7(36.8)	0(0.0)	2(10.5)	1(5.3)	0(0.0)	1(5.3)	3(15.8)	5(26.3)
	Ⅲ	4(26.7)	2(13.3)	1(6.7)	0(0.0)	0(0.0)	2(13.3)	4(26.7)	2(13.3)
小1	Ⅰ	7(70.0)	1(10.0)	0(0.0)	1(10.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.0)
	Ⅱ	6(60.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(10.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(30.0)	0(0.0)
	Ⅲ	2(20.0)	1(10.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	5(50.0)	2(20.0)
小3	Ⅰ	3(27.3)	0(0.0)	0(0.0)	3(27.3)	0(0.0)	1(9.1)	4(36.3)	0(0.0)
	Ⅱ	6(50.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(25.0)	0(0.0)	1(8.3)	2(16.7)	0(0.0)
	Ⅲ	8(61.4)	1(7.8)	0(0.0)	2(15.4)	0(0.0)	0(0.0)	2(15.4)	0(0.0)
小5	Ⅰ	7(58.3)	0(0.0)	2(16.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(16.7)	1(8.3)
	Ⅱ	9(69.2)	0(0.0)	0(0.0)	2(15.4)	0(0.0)	0(0.0)	2(15.4)	0(0.0)
	Ⅲ	2(18.2)	0(0.0)	1(9.1)	3(27.2)	1(9.1)	1(9.1)	1(9.1)	2(18.2)
大学生	Ⅰ	36(55.4)	5(7.8)	1(1.5)	14(21.5)	1(1.5)	3(4.6)	3(4.6)	2(3.1)
	Ⅱ	37(58.7)	4(6.3)	2(3.2)	9(14.3)	3(4.8)	4(6.3)	2(3.2)	2(3.2)
	Ⅲ	31(49.2)	1(1.6)	1(1.6)	14(22.2)	1(1.6)	8(12.7)	4(6.3)	3(4.8)
計		178 (43.4)	18 (4.4)	15 (3.6)	55 (13.3)	8 (1.9)	22 (5.3)	66 (16.0)	50 (12.1)

（　）内は％

A :一番目と二番目のこぶたは逃げ，おおかみも逃げる話。
A′:一番目と二番目のこぶたはおおかみに食べられ，おおかみは逃げる話。
B :一番目と二番目のこぶたはおおかみに食べられ，おおかみは死ぬ話。
B′:一番目と二番目のこぶたは逃げ，おおかみは死ぬ話。
C :一番目と二番目のこぶたはおおかみに食べられ，おおかみは三番目のこぶたに食べられる話。
C′:一番目と二番目のこぶたは逃げ，おおかみは三番目のこぶたに食べられる話。

Ⅲ群…一番目と二番目のこぶたはおおかみに食べられ，おおかみは三番目のこぶたに食べられる原話を与える群

6)　結果の処理方法

①　事前調査

一番目と二番目のこぶたとおおかみの結末に注目して，既知の「三びきのこぶた」の話を6種類に分けて，一番よく知っている話や感想について調べる。

②　理解テスト

得点は，幼児では，正答を5点，間違ってはいないが正答でもない場合は3点，選択肢による正解は2点，問題2～4，6～8で順番が誤っている場合は各1点，誤答は0点とする。小学生では，正答を5点，間違ってはいないが，正答でもない場合は．その程度に応じて4点，3点，2点とし，選択肢による正答は1点，誤答は0点とする。

③　感想，心情テスト

各問題の答えをいくつかの項目にわけて，各条件と年齢との特徴を調べる。

④　イメージテスト

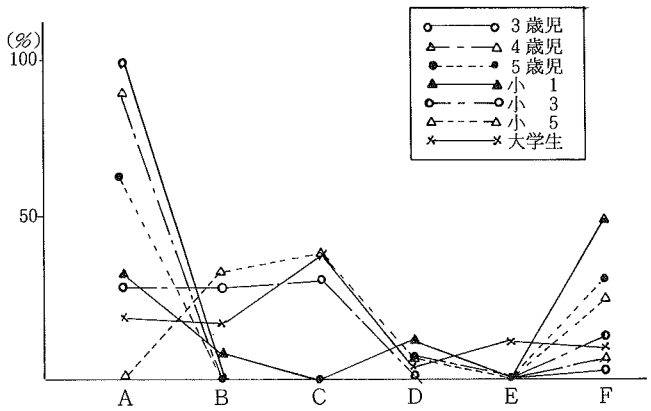
幼児と小学1年生は各尺度別にプロフィール表の左から3，2，1と3段階評定に得点化し，小学3年生と5年生，大学生は5，4，3，2，1と5段階評定に得点化する。

Ⅳ　結果と考察

Table 2に「三びきのこぶた」の知っていた内容の話と各条件ごとの人数を示す。

Table 2から，物語を知らなかった者は，全体の12.1％にすぎず，ほとんどの者が物語を知っていた。話の内容を忘れていても「三びきのこぶた」という話があることは知っているようである。各年齢とも一番目と二番目のこぶたもおおかみも逃げる話を一番よく知っているようである。したがって，仮説①は支持されたと言える。なお，各年齢で条件間の有無差をX^2検定によってみてみると，各年齢とも条件間に有無差は見られず，その後の調査に影響が見られないと思われる。

Fig. 1の「知っていた話の感想」を示す。



A	おもしろかった 楽しかった
B	三番目のこぶたは えらい・かしこい
C	努力するべき，等の教訓 を感じた。
D	かわいそうだった
E	残酷・おおかみやこぶた を殺さなくてもいいのに
F	その他・無答

Fig. 1　「知っていた話の感想」の各感想における割合

幼児に対して，無答の場合，「おもしろかったか」と質問したので，低年齢ほど「おもしろかった」「楽しかった」という感想に集中しているが，高年齢になるほどいろいろな感想がでてきている。その中で，「教訓を感じた」という感想が1年生のでは全くなかったが，3年生から5年生，大学生と多くなっている。「残酷」という感想はこぶたやおおかみが死なない話を知っている人の中にもでてくるもので大学生からあらわれてきている。

Fig. 2に理解テストにおける平均得点を示す。

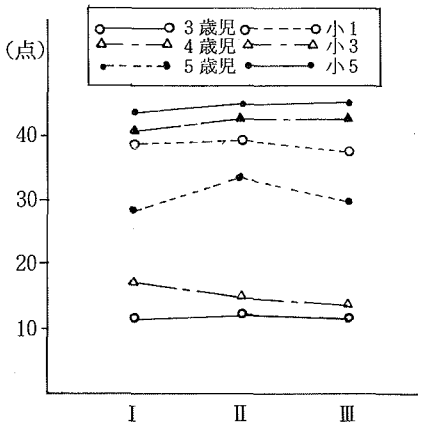


Fig. 2　理解テストにおける平均得点

Fig. 2によると，高年齢になるほど各条件とも平均得点が高くなって，1％水準で有無差が認められるが，条件間には有無差は認められない。これは物語の出来事に対応した問題であって，条件の違いによる内容の問題とはあまり関係のない箇所を質問したからではないかと思われる。

Fig. 3の①～⑥に各年齢における理解テストの問題ごとの平均得点を示す。

問題1～4，6～8は各条件とも同じ場面についての内容なので，条件によって異なる場面についての問題5，9に注目して考察してみる。問題5について，4，5歳児にほと

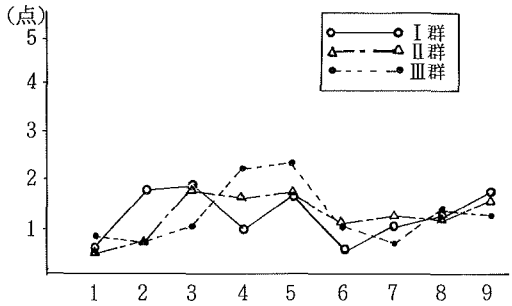


Fig. 3－①　理解テストにおける問題ごとの平均得点　－3歳児

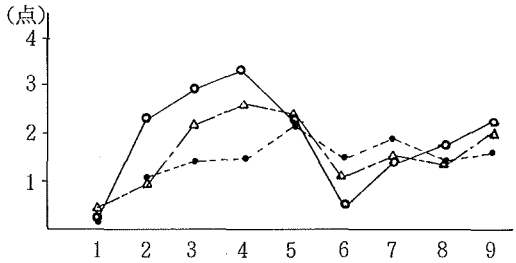


Fig. 3　②　－4歳児－

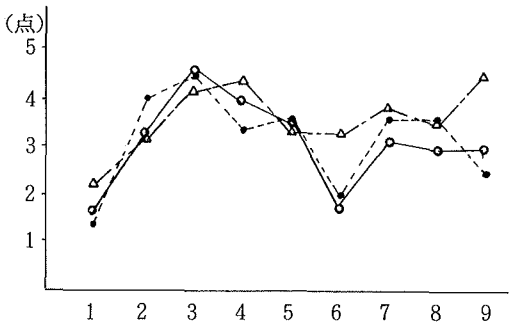


Fig. 3　－③　－5歳児－

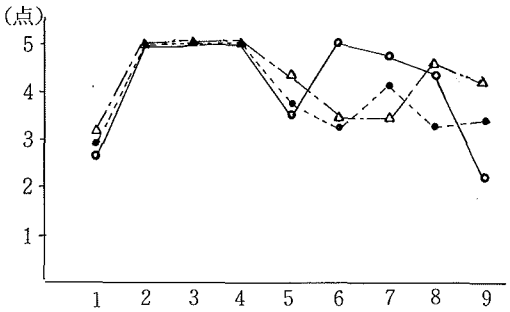


Fig. 3　④　－小　1－

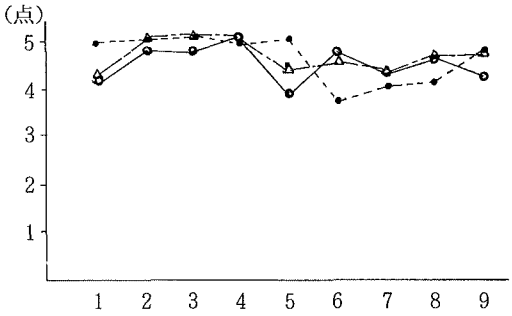


Fig. 3－⑤　－小　3－

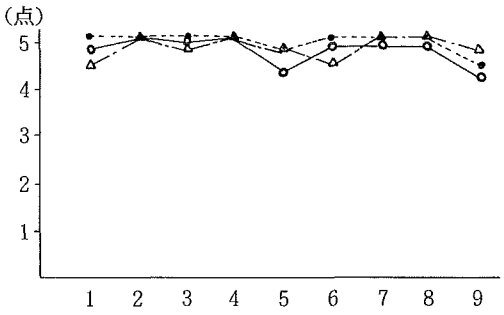


Fig. 3－⑥　－小　5－

んど差がないが，それ以外の年齢では，Ⅱ，Ⅲ群の方がⅠ群よりも少し平均得点が高い，問題9では，幼児はⅢ群がⅠ，Ⅱ群より少し平均得点が低く，小学生ではⅠ群よりⅡ，Ⅲ群の方が平均得点が高い。これは，幼児が「やっつけられた」という事に満足して，結果的に「食べられた」事にあまり注目しなかったため，言い易いと思われる「死んだ」「逃げた」という言葉で反応したと思われる。したがって，仮説②は幼児を除いて支持されたといえる。

Fig. 4の①～⑦に心情テストの(1)「三番目のこぶたのおおかみとの約束を守らなかった時の気持ち」を示す。

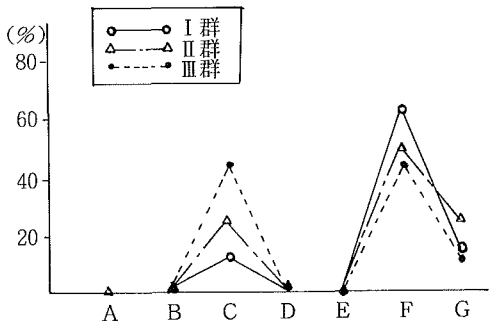


Fig. 4－①　心情テスト(1)の各項目における割合－3歳児－

A：約束を守れば食べられるから，守らなくてもいいや。
B：こんな約束守るもんか，だましてやる
C：ざまあみろ
D：ああ，よかった
E：守った方がよかったかな
F：怖かった・いやだった
G：その他・無答

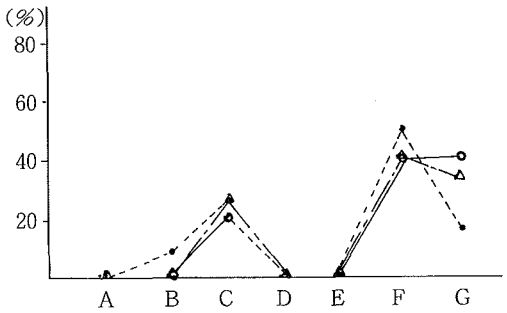


Fig. －②　－4歳児－

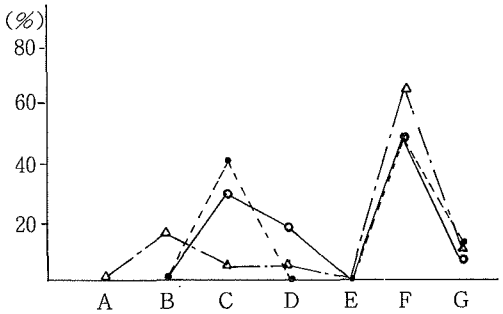


Fig. －③　－5歳児－

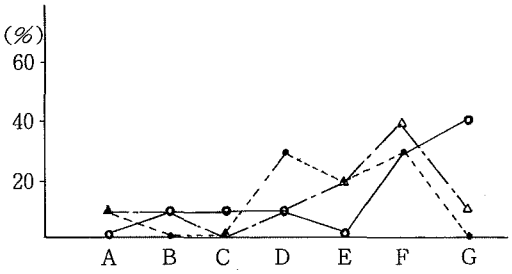


Fig. 4－④　－小　1－

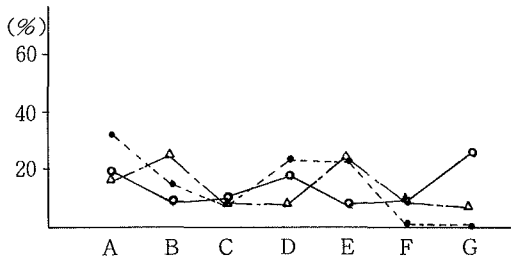


Fig. 4－⑤　－小　3－

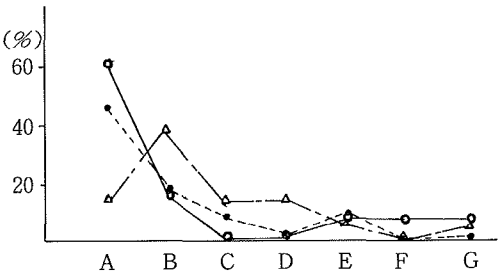


Fig. 4－⑥　－小　5－

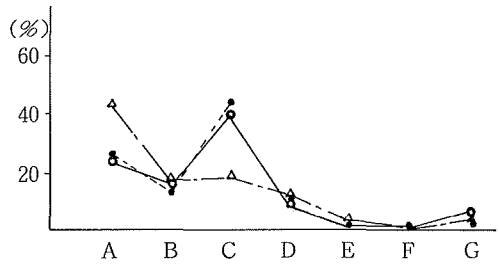


Fig. 4－⑦　－大学生

各年齢で条件に有意差は見られないが，これは条件による話の違いとは関係のない場面の問題のせいであろう。「その他，無答，無答」の項目に注目すると，各年齢ともⅢ群では少なく，1，3年生と大学生ではⅠ群＞Ⅱ群＞Ⅲ群の順に少ない。これはⅠ群よりⅡ，Ⅲ群の方がこぶたの心情をつかみ易かったからだといえる。年齢別では幼児は「ざまあみろ」という得意な心情と「怖かった，いやだ」という恐怖感に二分され，1年生では恐怖感ととらえている者が少し多く，3年生は大体同じ位，5年生では「守れば食べられるから」という約束を破る事への言い訳や「だましてやる」という心情ととらえる者が多く，大学生では約束を破る事への言い訳と「ざまあみろ」という心情としてとらえている者が多い。そのことは，1年生までは三番目のこぶたをよい者で弱い者ととらえているが，3年生からはそれほど弱くなく，むしろずる賢くしっかりしている，ととらえている。

Fig. 5－①～⑦に(2)「こぶたに約束を破られた時のおおかみの気持ち」を示す。

A	B	C	D
悔しい	やられてしまった	悲しかった いやだった	その他 無答

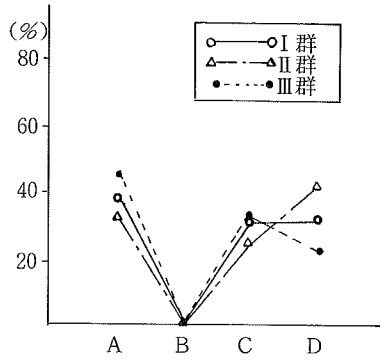


Fig. 5－①　心情テストの各項目における割合　－3歳児－

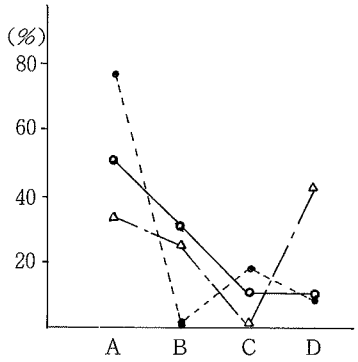


Fig. 5－②　－4歳児－

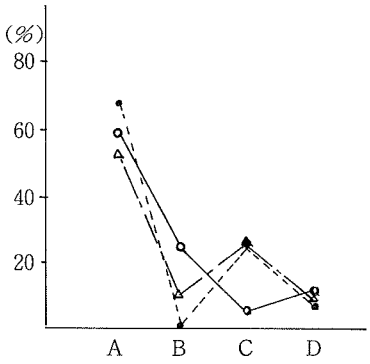


Fig. 5－③　－5歳児－

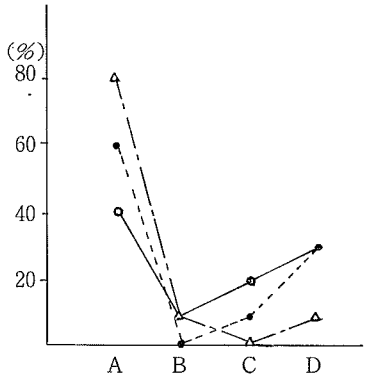


Fig. 5－④　－小1－

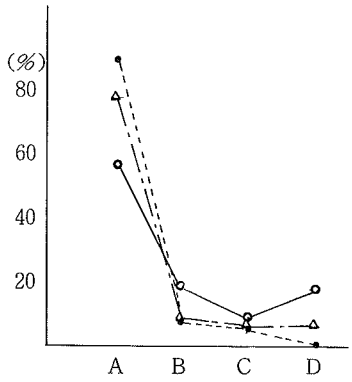


Fig. 5－⑤　－小3－

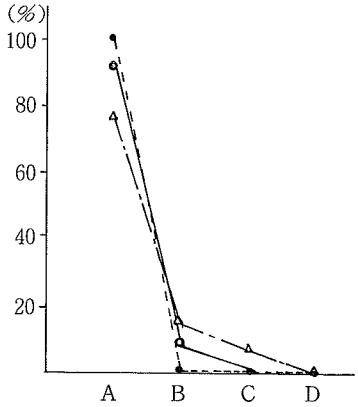


Fig. －⑥　－小5－

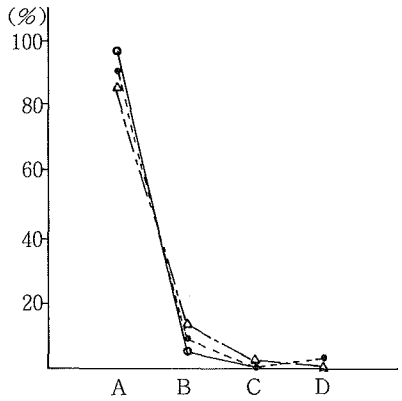


Fig. 5－⑦　－大学生－

(1)の課題と同じように各年齢とも条件間に有意差が認められない。各年齢別では3歳児は「悔しい」という怒りの気持ちと「悲しかった，いやだった」という気持ちに二分され，4歳児では「悔しい」に集中しだし，5年生と大学生で「悔しい」という怒りの気持ちとしてとらえている。

Fig. 6－①～⑦に(3)「一番目のこぶたの気持ち」を示す。

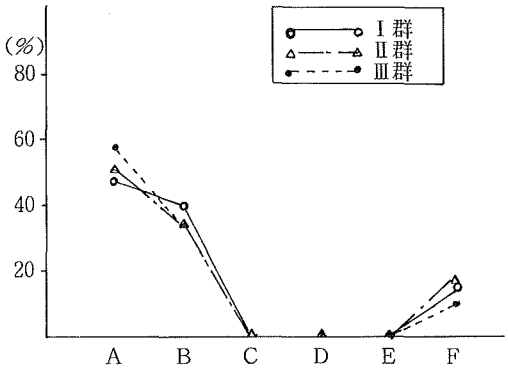


Fig. 6－①　心情テスト(3)の各項目における割合－3歳児－

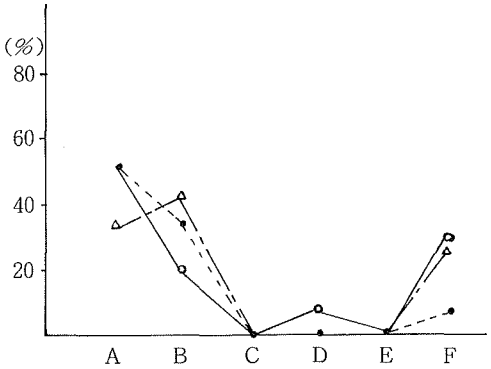


Fig. 6－②　－4歳児－

A	B	C	D	E	F
怖い もうだめだ	悲しい いやだ	ああ 危なかった	悔しい	もっと丈夫な 家を建てれば よかった	その他 無答

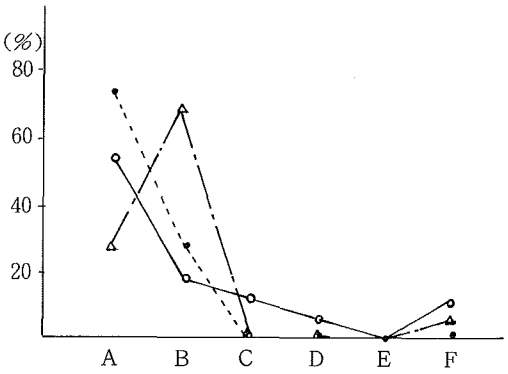


Fig. 6－③　－5歳児－

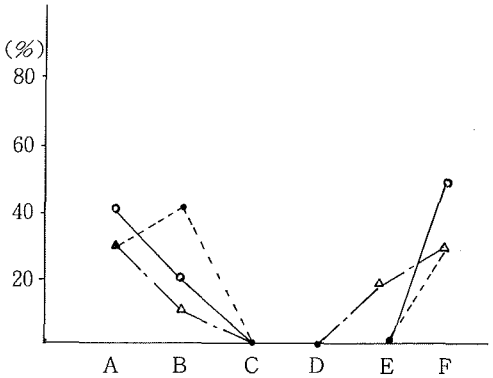


Fig. 6－④－小1－

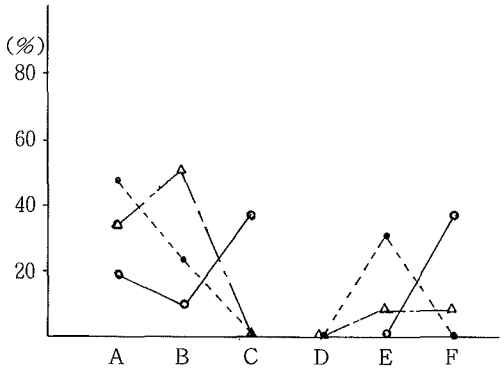


Fig6－⑤　－小　3－

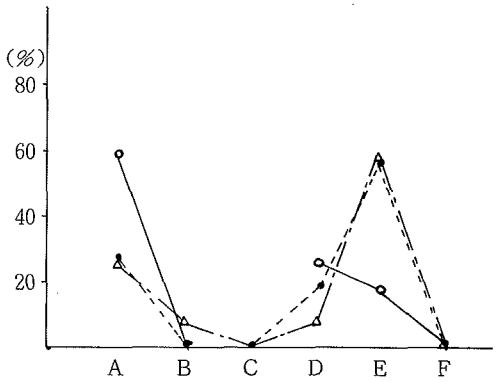


Fig6－⑥　－小　5－

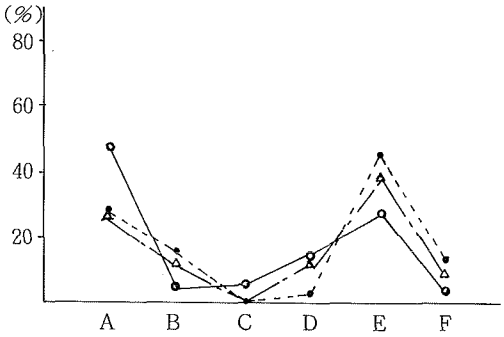


Fig6－⑦　－大学生－

条件別にみると，5歳児では2.5％水準で3年生と大学生では0.5％水準で有意差が認められる。5歳児のⅠ，Ⅲ群は「恐い，もうだめだ」Ⅱ群は「悲しい，いやだ」と受け身的で，こぶたを弱者とみている。3年生ではⅡ，Ⅲ群の方がⅠ群よりも食べられたという話の影響を受けて恐怖の気持ちととらえた者が多い。大学生ではⅡ，Ⅲ群はⅠ群に比べて「もっと丈夫な家を建てたらよかった」と後悔の気持ちととらえている。4歳児から3年生まではⅡ，Ⅲ群はⅠ群よりも「その他，無答」の者が少ない点で，Ⅱ，Ⅲ群の方がこぶたの心情を明確にとらえ易かったようである。逆に，大学生でⅡ，Ⅲ群の「その他，無答」が多い理由として，Ⅱ，Ⅲ群ではこぶたは食べられてしまうという事にこだわって考えにくくなってしまったと思われる。

Fig. 7－①－⑦に(4)「二番目のこぶたの気持ち」を示す。

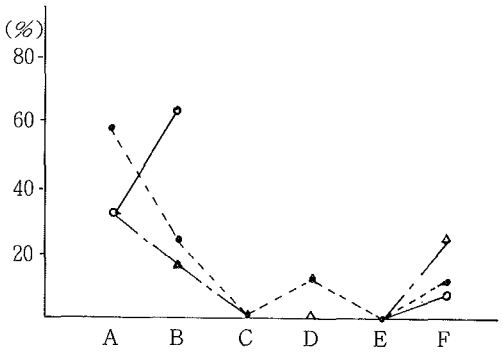


Fig. 7－①　心情テスト(4)の各項目における割合　－3歳児－

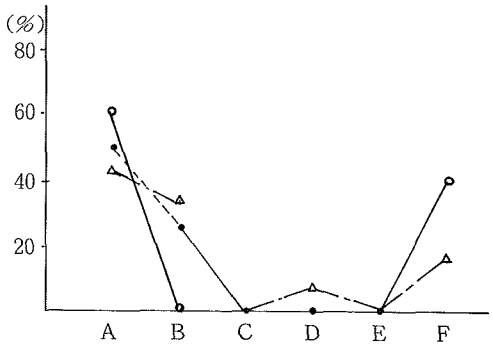


Fig. 7－②　－4歳児－

A	B	C	D	E	F
怖い もうだめだ	悲しい いやだ	ああ 危なかった	悔しい	もっと丈夫な家を建てたらよかった	その他 無答

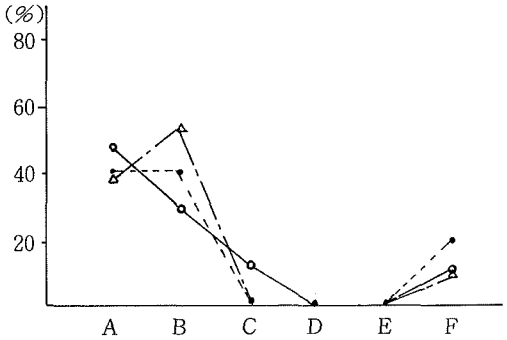


Fig. 7－③　－5歳児－

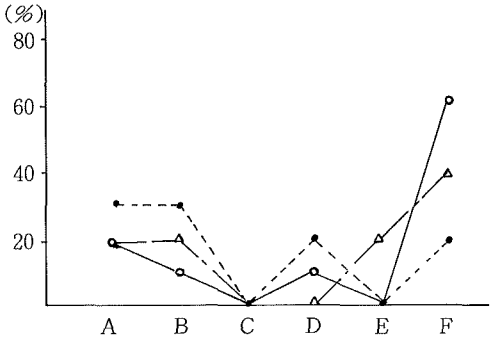


Fig. 7－④　－小　1－

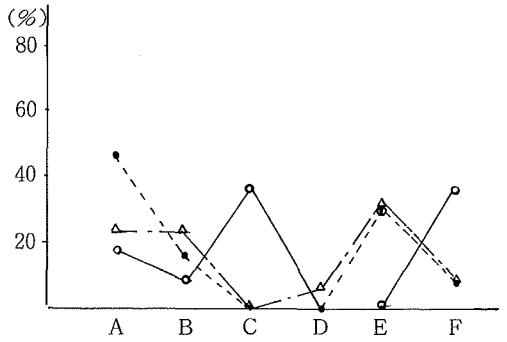


Fig. 7－⑤　－小　3－

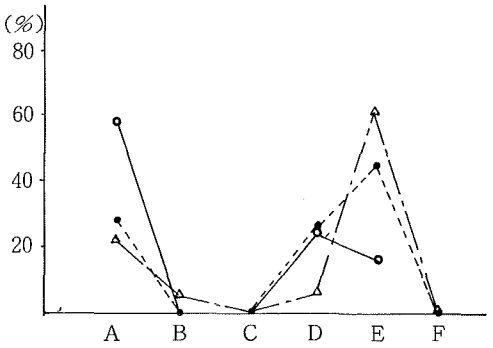


Fig. －⑥　－小　5－

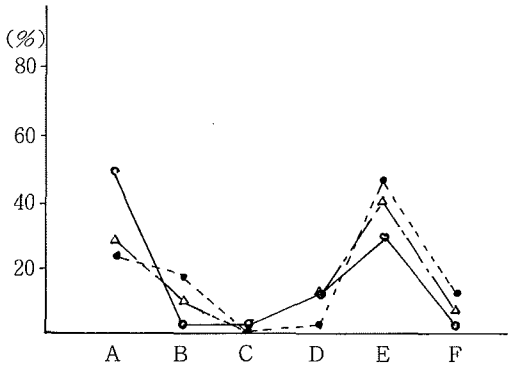


Fig. 7－⑦　－大学生－

条件別にみると，3年生と大学生にそれぞれ2.5％水準，10％水準で有意差が認められる。3年生では(3)と同様にⅡ，Ⅲ群の方がⅠ群よりも恐怖を感じている。「もっと丈夫な家を建てたら良かった」と後悔しているととらえている者がⅡ，Ⅲ群のみにみられ，大学生も同じように物語の内容の影響を受けている。年齢別にみると，幼児は恐怖を感じているが，小学生は「悔しい」気持ちや後悔の気持ちに二分されている。

Fig. 8－①～⑦に(5)「おおかみをやっつけた時のこぶたの気持ち」を示す。

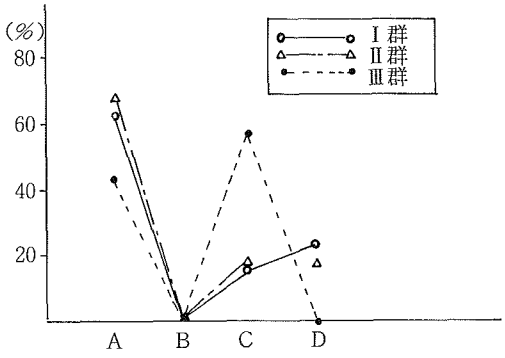


Fig. 8－①　心情テスト(5)の各項目における割合　－3歳児－

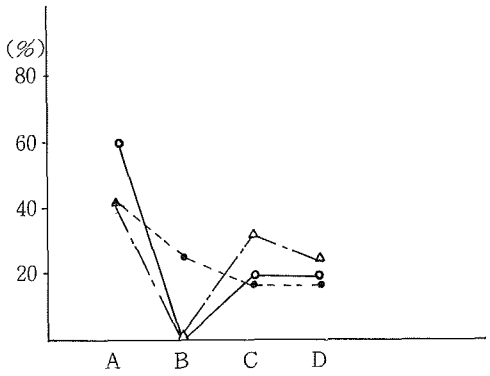


Fig. 8－②　－4歳児－

A	B	C	D
やった ざまあみろ	ああ よかった	かわいそう だったかな	その他 無　答

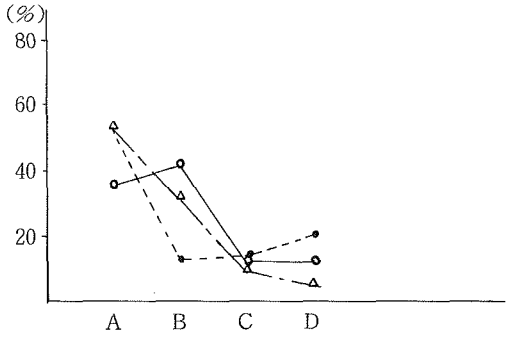


Fig. 8－③　－5歳児－

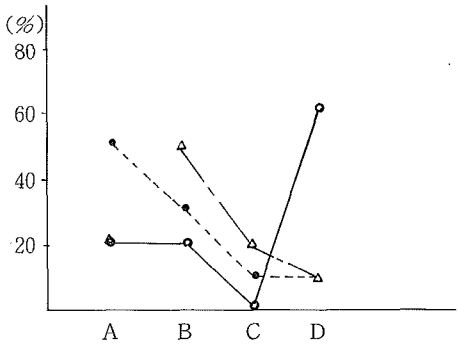


Fig. 8－④　－小　1－

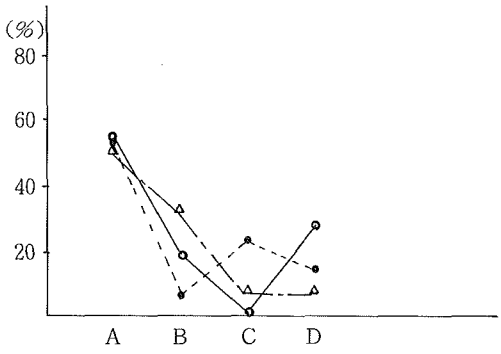


Fig. 8－⑤　－小　3－

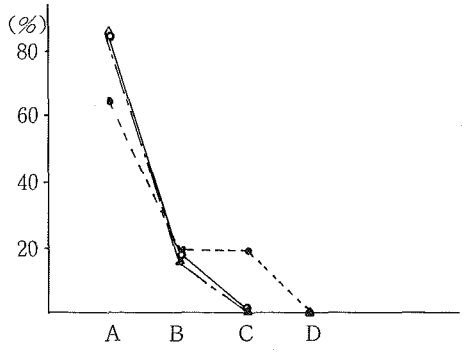


Fig. 8－⑥　－小　5－

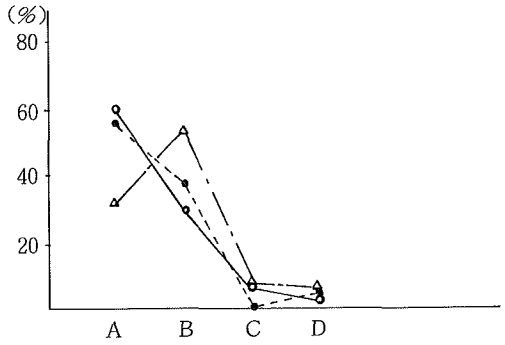


Fig. 8－⑦　－大学生－

大学生に2.5％水準で条件間の有意差が認められ，Ⅰ，Ⅲ群は「やった，ざまあみろ」という満足感ととらえ，Ⅱ群は「ああよかった」と安心感としてとらえられている。年齢別では3，4歳児は「かわいそうだったかな」ととらえた者が多いが，小学生ではⅡ，Ⅲ群にのみ見られ，大学生で食べる事と後悔との矛盾を感じていない。

Fig. 9－①～⑦に(6)「おおかみのこぶたにやられた時の気持ち」を示す。

A：悔しい
B：やられてしまった
C：こぶたを食べようとしなけりゃよかった
D：もうこぶたの家には行かないぞ
E：悲しい・いやだ
F：死んでいたので何も考えていない
G：その他・無答

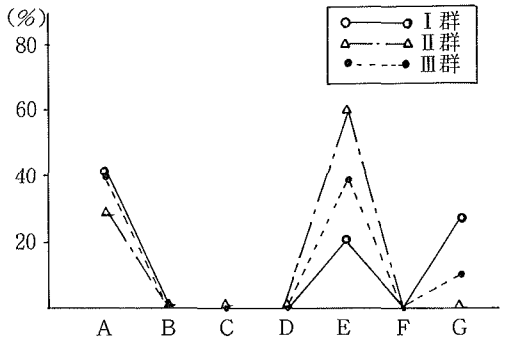


Fig. 9－①　心情テスト(6)の各項目における割合　－3歳児－

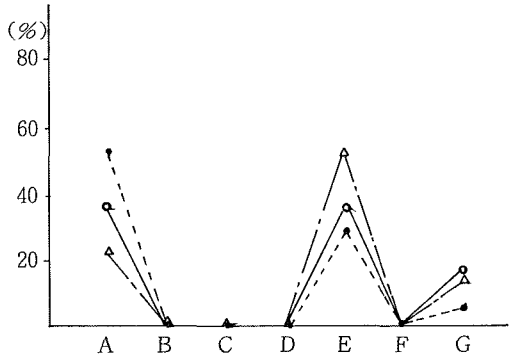


Fig. 9－②　－4歳児－

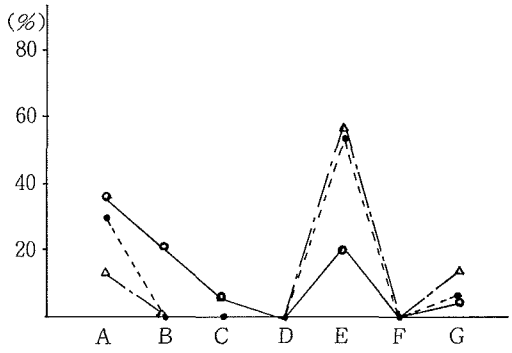


Fig. 9－③　－5歳児－

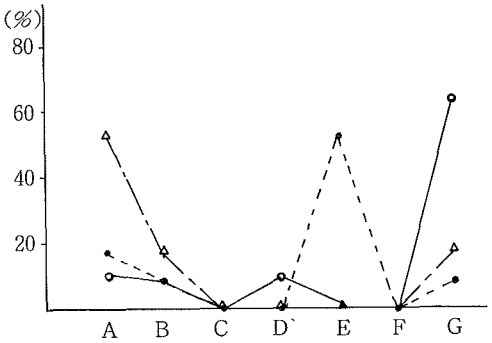


Fig. 9－④　－小　1－

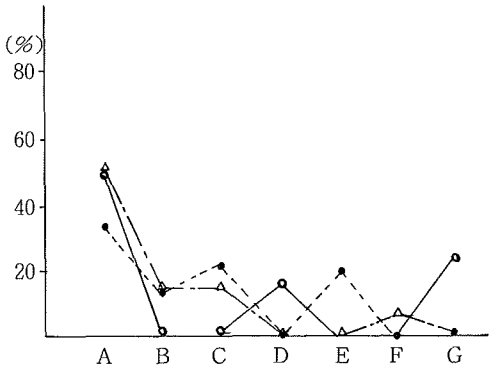


Fig. 9－⑤　－小　3－

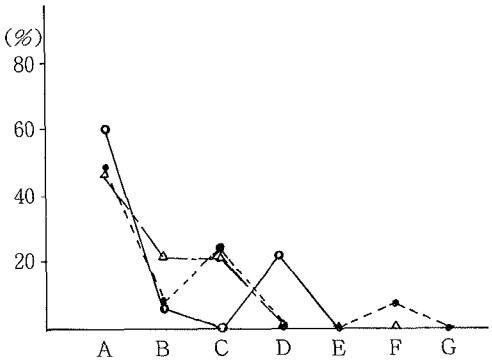


Fig. 9－⑥　－小　5－

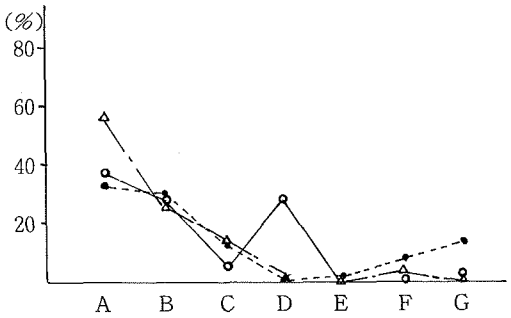


Fig. 9－⑦　－大学生－

条件間に1年生と大学生で0.5%水準，3年生で2.5%水準で有意差が認められる。1年生では「悲しい，いやだ」とⅢ群にのみ見られ，Ⅰ群に「その他，無答」が多い。3年生も1年生とほぼ同じ。大学生で「もうこぶたの家には行かないぞ」というのがⅠ群にだけ見られる。年齢別にみると，幼児は「悲しい，いやだ」ととらえ，1・3年生になると「死ぬ」と「食べられる」との区別もできてくる。

以上，心情テストをまとめてみると，心情(1)，(2)を除いて，(3)，(4)，(5)，(6)に有意差が認められたことから，各条件の物語の内容の違いによって心情のとらえ方が変わるといえる。心情(1)，(2)の場合，各条件とも同じ内容の場面についてなので有意差が認められなかったのかもしれない。幼児と小学生では「その他，無答」の数からⅢ群あるいはⅡ，Ⅲ群が他の群に比べて心情をとらえ易く，大学生ではⅡ，Ⅲ群の話の内容に抵抗を感じて答えにくいようである。年齢別では幼児は「逃げる，死ぬ，食べられる」事の違いを感じていないが，1年生頃からそれらの違いをとらえ，それほど抵抗を感じていないが，大学生になると，その抵抗が強くなる。以上のことより仮説②は支持されたといえる。

Fig. 10－①～⑦にイメージテストの(1)「一番目のこぶたのイメージ」のプロフィールを示す。

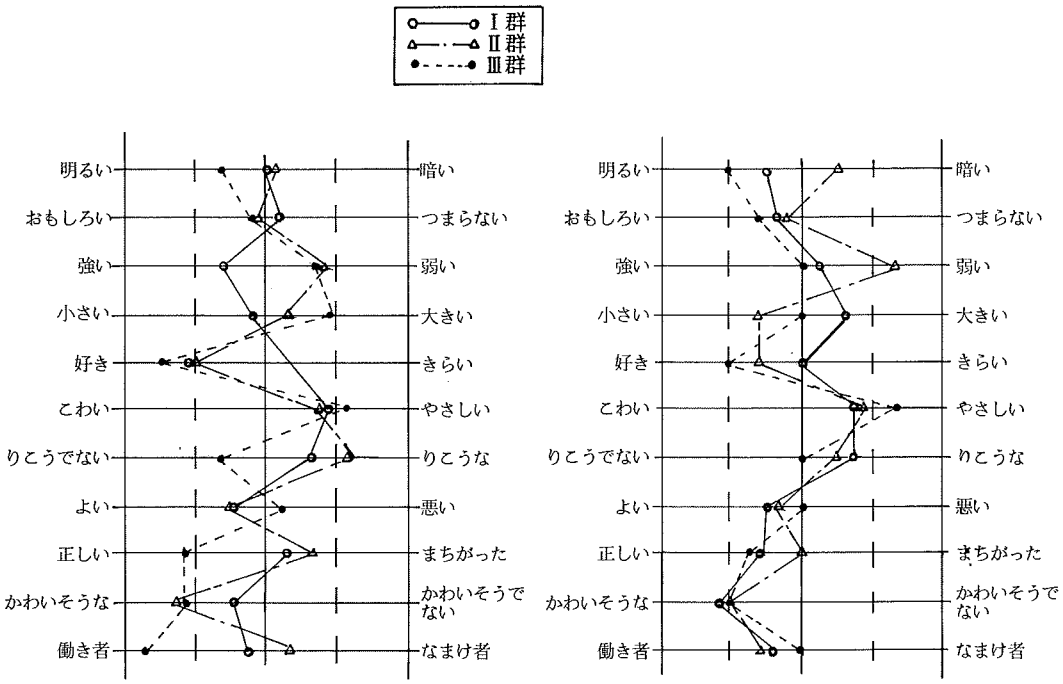


Fig. 10－①　“一番目のこぶた”のイメージ　－3歳児－

Fig. 10－②　－4歳児－

Fig. 10－③　－5歳児－

Fig. 10－④　－小　1－

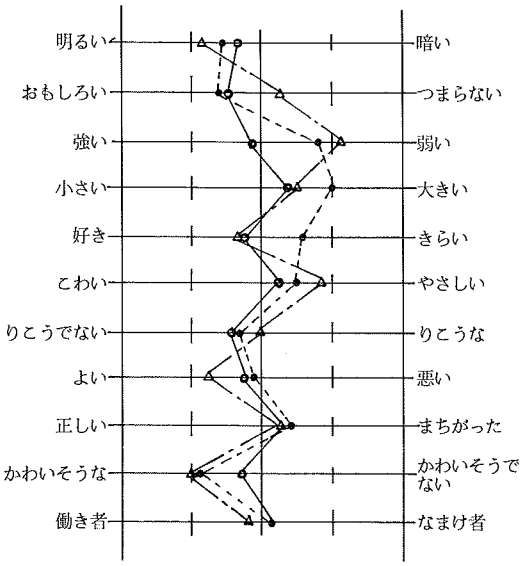


Fig. 10－⑤　－小　3－

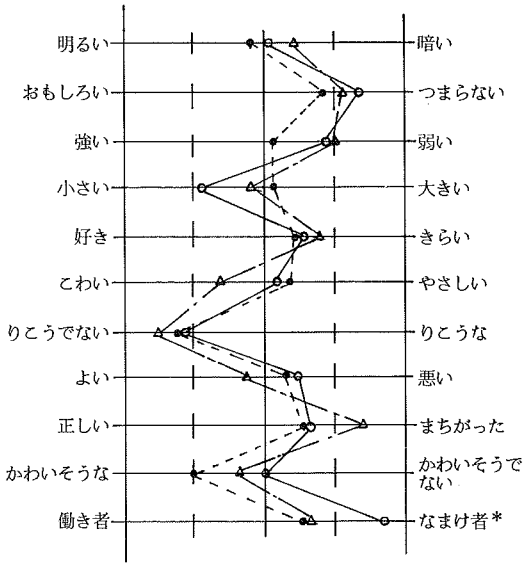


Fig. 10－⑥　－小　5－

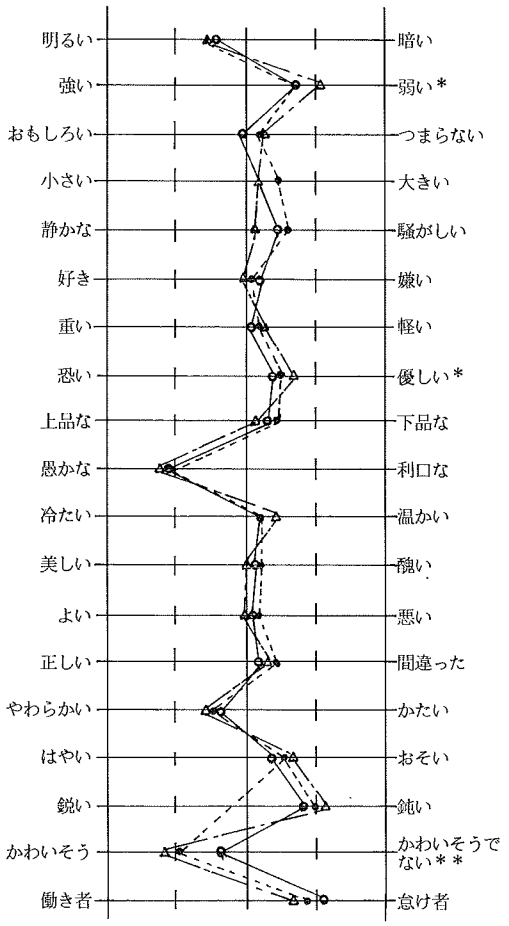


Fig. 10－⑦　－大学生－

3歳児で各条件に共通しているのは「やさしく，好きだ」ということで，Ⅰ群ではあまり強いイメージは見られず，Ⅱ群では「りこうでかわいそう」Ⅲ群では「正しく働き者でかわいそう」ととらえている。4歳児では共通したイメージはかわいそうでⅠ群で強いイメージが見られず，Ⅱ群で「弱い」Ⅲ群で「やさしい」ととらえている。5歳児では共通したイメージは「やさしくりこう」でⅠ群では「おもしろい，好き，かわいそう，よい，正しい，働き者」ととらえ，Ⅱ群では「よい」Ⅲ群では「かわいそう」ととらえている。1年生では共通したイメージは特に見られず，Ⅰ群では「明るく，やさしい」Ⅱ群では「おもしろい，好き，やさしい，りこう，よい，かわいそう，働き者」Ⅲ群では「よい」ととらえている。3年生では共通したイメージは特に見られず，Ⅰ群で強いイメージは見られず，Ⅱ群で「弱い，かわいそうな」Ⅲ群で「大きい」ととらえている。5年生では共通したイメージは「りこうでない」，Ⅰ群で「つまらなく，なまけ者」ととらえており，5％水準で条件間に有意差が認められる。Ⅱ群では「つまらなく，弱く，まちがっている」Ⅲ群では「かわいそう」ととらえている。大学生では共通イメージは「愚かな」でⅡ群に

のみ強いイメージとして「鈍く，怠け者」が見られる。「強い－弱い」「恐い－優しい」の尺度に5％水準で，「かわいそう－かわいそうでない」の尺度に1％水準で有意差が認められる。

以上の事より，特に5年生と大学生に各条件における話の影響を受けている。低年齢では比較的良いイメージをもっており，「やさしく，りこうで，かわいそう」ととらえているが，3年生頃からあまり良くないイメージになって，「りこうでなく，つまらない」ととらえている。

Fig. 11－①～⑦に(2)「二番目のこぶたのイメージ」プロフィールを示す。

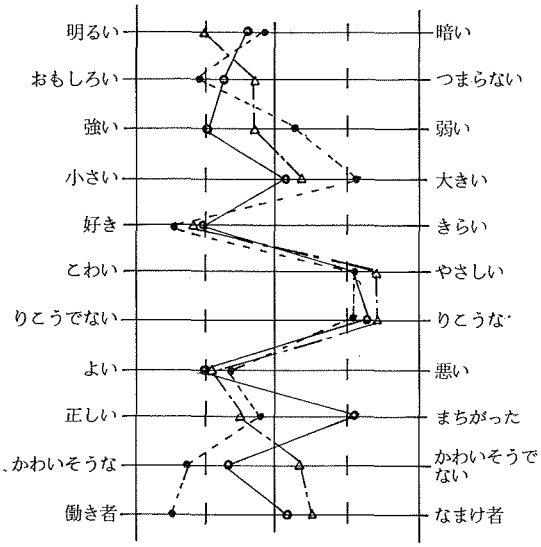


Fig. 11－①　“二番目のこぶた”のイメージ　－3歳児－

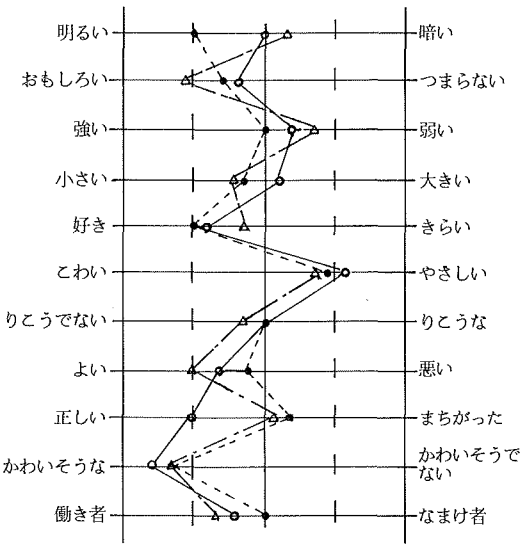


Fig. 11－11②　－4歳児－

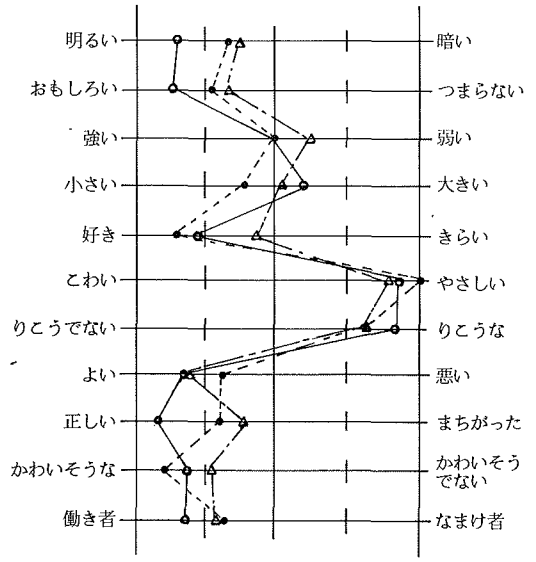


Fig. 11－③　－5歳児－

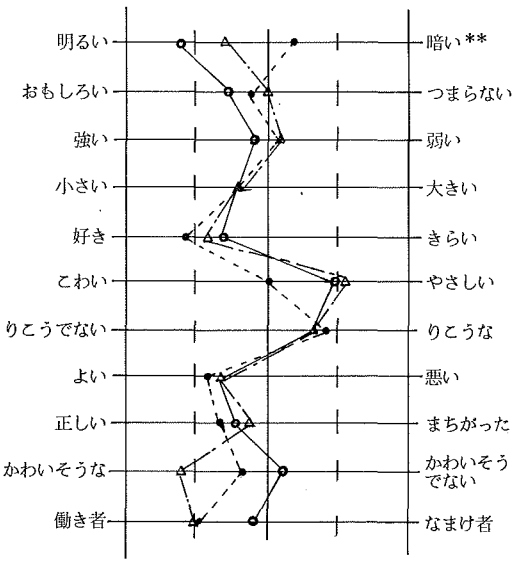


Fig. 11－④　－小　1－

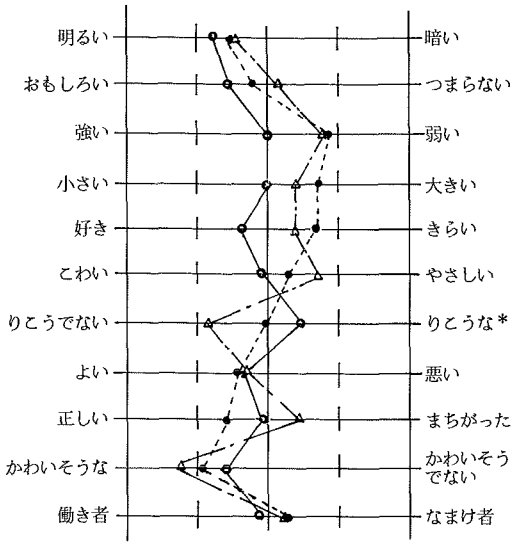


Fig. 11－⑤　－小　3－

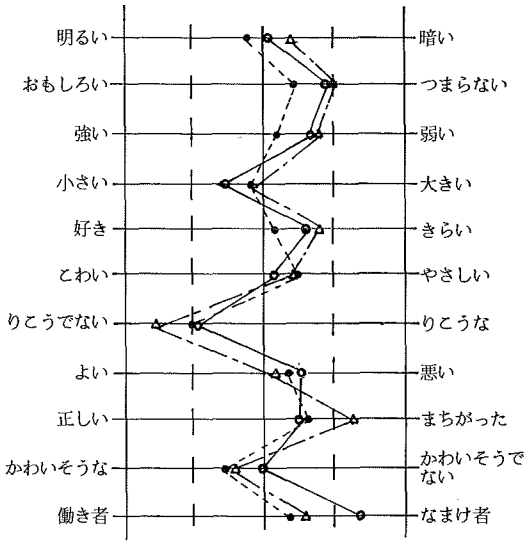


Fig. 11－⑥　－小　5－

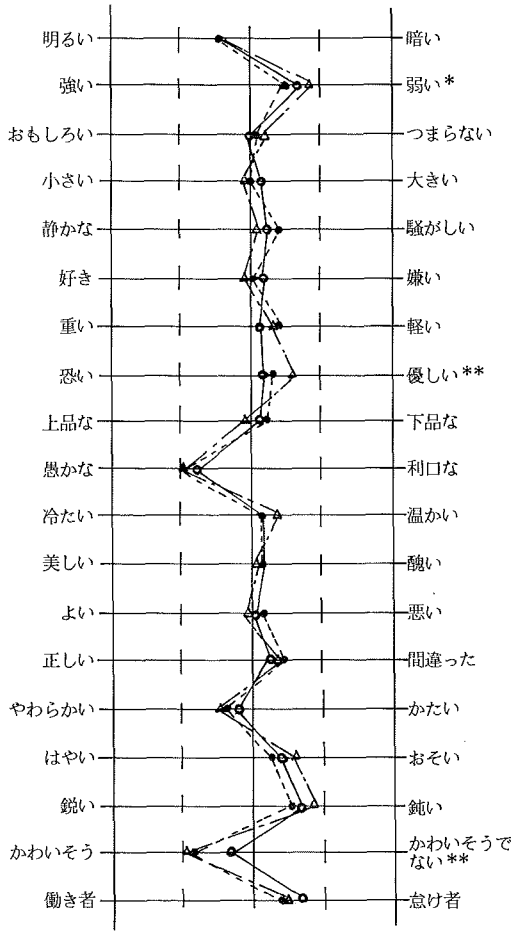


Fig. 11－⑦　－大学生－

3歳児に「働き者－なまけ者」の尺度で条件間に5％水準で有意差が認められ，共通なイメージは「好き，やさしい，りこう」でⅠ群では「強い，よい，まちがっている」Ⅱ群では「明るい，よい」Ⅲ群では「おもしろい，大きい，かわいそう」ととらえている。4歳児では「明るい－暗い」の尺度で1％水準で有意差が認められ，共通イメージは「かわいそう」であり，Ⅰ群では「やさしい，正しい」Ⅱ群で「おもしろい，よい」Ⅲ群で「好き」ととらえている。5歳児では共通イメージは「やさしく，りこう」であり，Ⅰ群では「明るい，おもしろい，好き，よい，正しい，かわいそう，働き者」Ⅱ群では「よい」Ⅲ群で「好き，かわいそう」ととらえている。1年生では「明るい－暗い」の尺度で1％水準で条件間に有意差が認められ，共通イメージは特に見られず，Ⅰ群で「やさしい」Ⅱ群で「やさしく，かわいそう」Ⅲ群で「好きで働き者」ととらえている。3年生では「りこうでない－りこうな」の尺度で5％水準で条件間に有意差が認められ，強いイメージはⅡ群においてのみ見られ，「かわいそう」ととらえている。5年生では共通イメージは特に見られず，Ⅰ群では「なまけ者」Ⅱ群では「つまらない，りこうでない，まちがっている」Ⅲ群では「りこうでない」ととらえている。大学生

では「強い－弱い」で５％水準，「恐い－優しい」「かわいそう－かわいそうでない」で１％水準で有意差が認められる。

以上から，二番目のこぶたのイメージも各条件における話の影響を受けている。そして，「やさしく，りこう」という良いイメージから「つまらない，りこうでない」という良くないイメージに変わっている。

Fig. 12－①～⑦に(3)「三番目のこぶたのイメージ」プロフィールを示す。

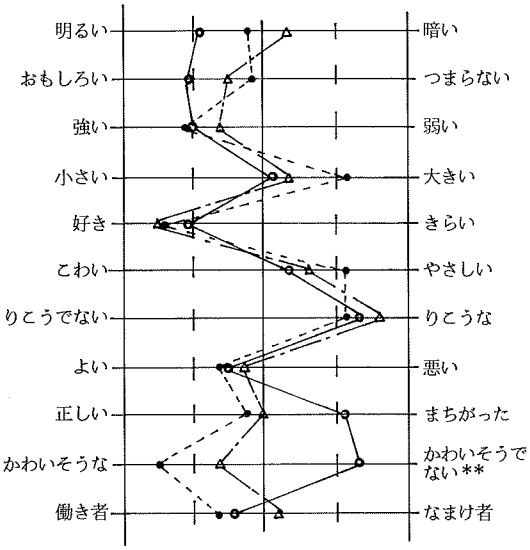


Fig. 12－①　“三番目のこぶた”のイメージ　－３歳児－

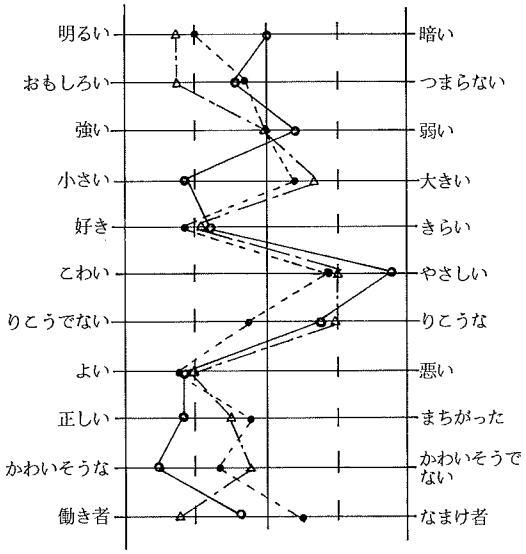


Fig. 12－②　－４歳児－

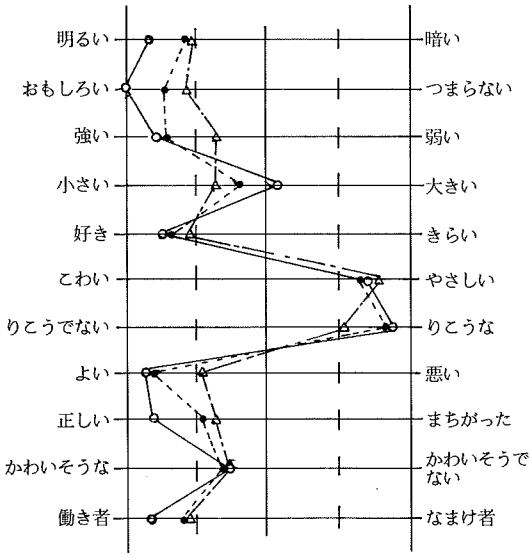


Fig. 12－③　－５歳児－

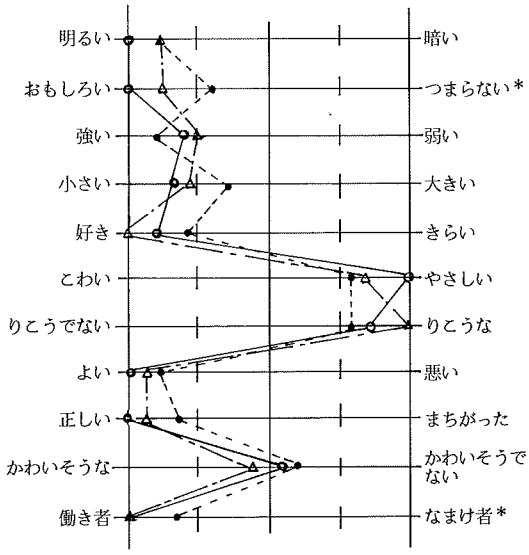


Fig. 12－④　－小　１－

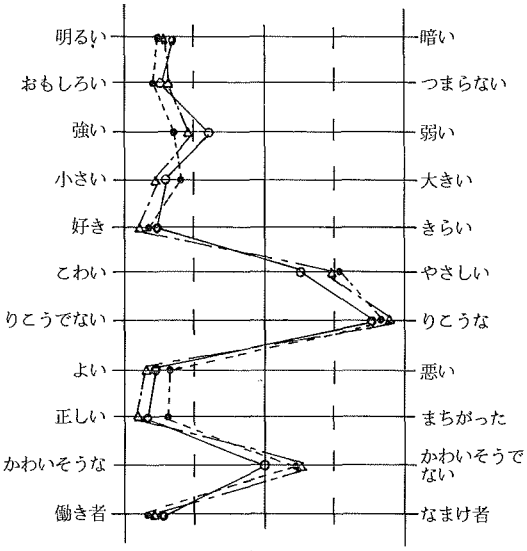


Fig. 12－⑤　－小　3－

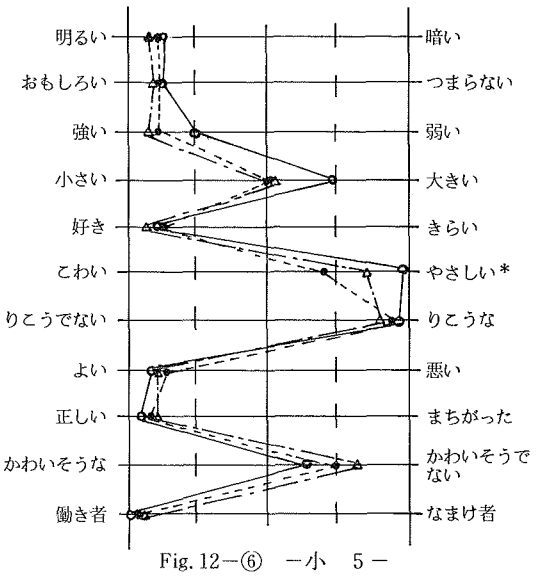


Fig. 12－⑥　－小　5－

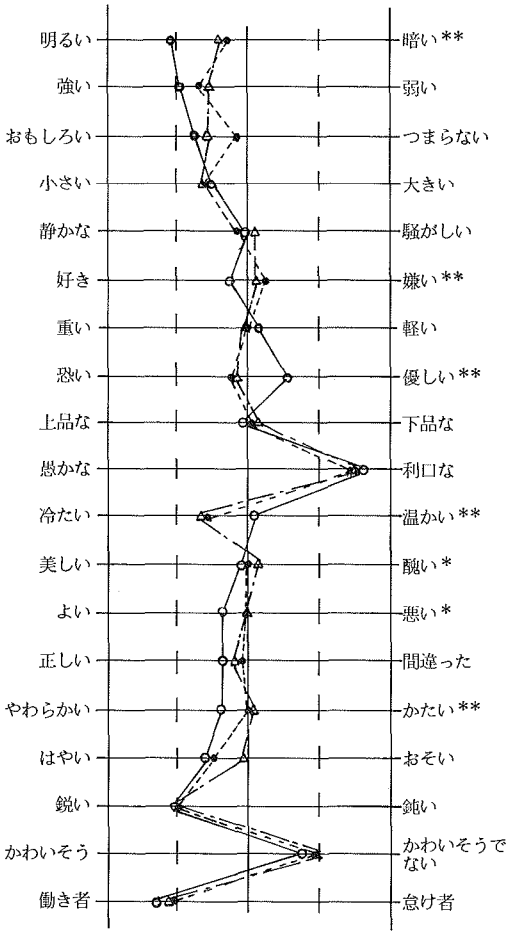


Fig. 12－⑦　－大学生－

3歳児において「かわいそう－かわいそうでない」の尺度で1％水準で有意差が認められ，共通イメージは「好き，りこう」であり，Ⅰ群では「おもしろい，強い，まちがった」Ⅱ群では特に見られず，Ⅲ群では「強い，大きい，やさしい」ととらえている。4歳児では共通イメージは「よい」でⅠ群では「小さい，やさしい，正しい，かわいそう」Ⅱ群で「明るい，おもしろい，やさしい，りこう，働き者」Ⅲ群で「明るい，好き」ととらえている。5歳児で共通イメージは「明るい，おもしろい，好き，やさしい，りこう，働き者」でⅠ群で「強い，よい，正しい」Ⅱ群で特に強いイメージは見られずⅢ群で「強い，よい」ととらえている。1年生で「おもしろい－つまらない」「働き者－なまけ者」の尺度で5％水準で有意差が見られ，共通イメージは「明るい，強い，好き，やさしい，りこうな，よい，正しい，働き者」でⅠ，Ⅱ群で「小さい」Ⅲ群では特に強いイメージは見られない。3年生で共通イメージは「明るい，おもしろい，小さい，好き，りこう，よい，正しい，働き者」でⅠ群で特に強いイメージは見られず，Ⅱ群で「強く，やさしい」Ⅲ群で「強く，やさしい」ととらえている。5年生で「こわい－やさしい」の尺度で5％水準で有意差が見られ，共通イメージは「明るい，おも

しろい，強い，好き，りこう，よい，正しい，働き者」Ⅱ，Ⅲ群では「かわいそうでない」とととらえている。

以上から三番目のこぶたのイメージは各条件における話の影響を受けている。又，どの年齢も主人公のせいか，比較的同じようなイメージをもっている。

Fig. 13－①～⑦に(4)「おおかみのイメージ」プロフィールを示す。

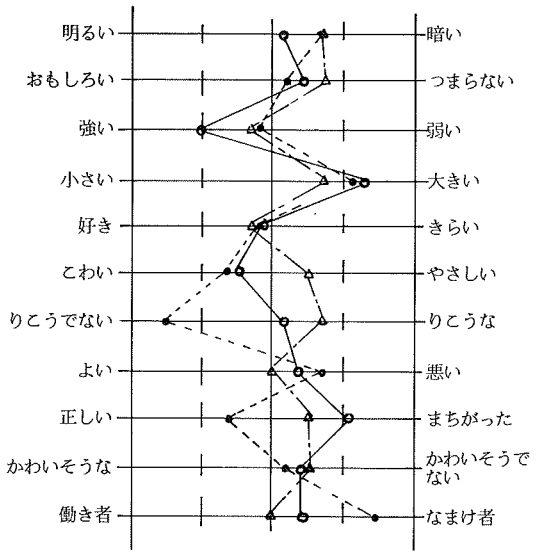


Fig. 13－①　“おおかみ”のイメージ
－3歳児－

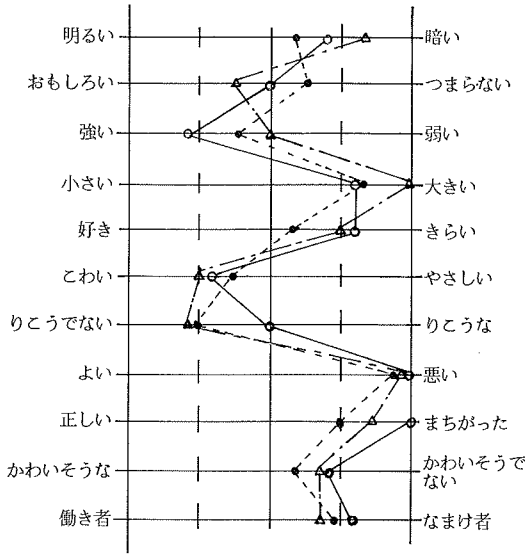


Fig. 13－②　－4歳児－

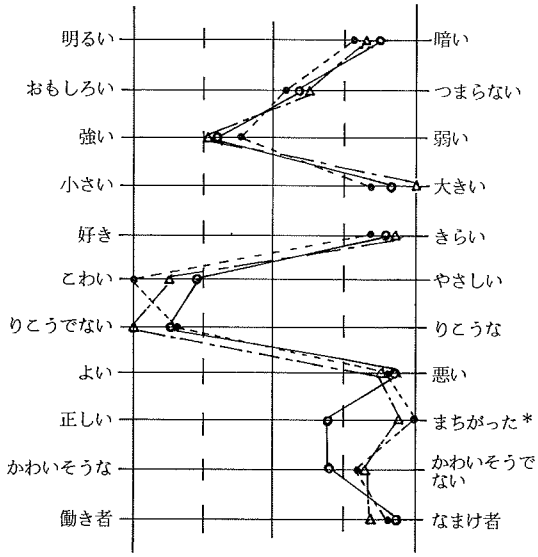


Fig. 13－③　－5歳児－

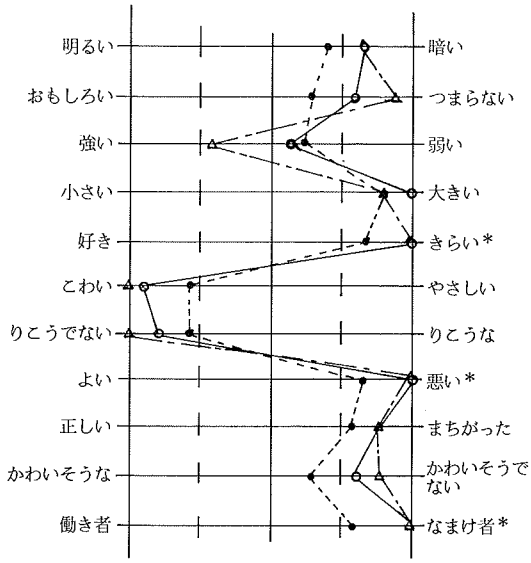


Fig. 13－④　－小　1－

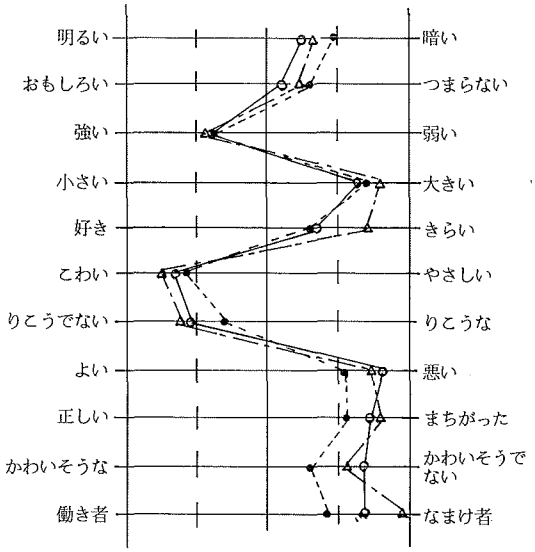


Fig. 13－⑤　－小　3－

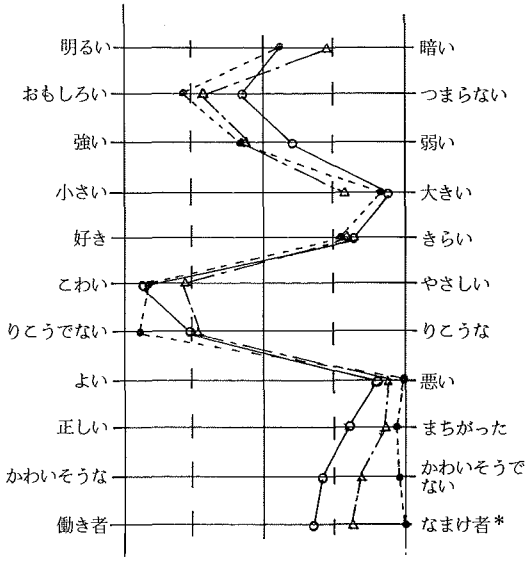


Fig. 13－⑥　－小　5－

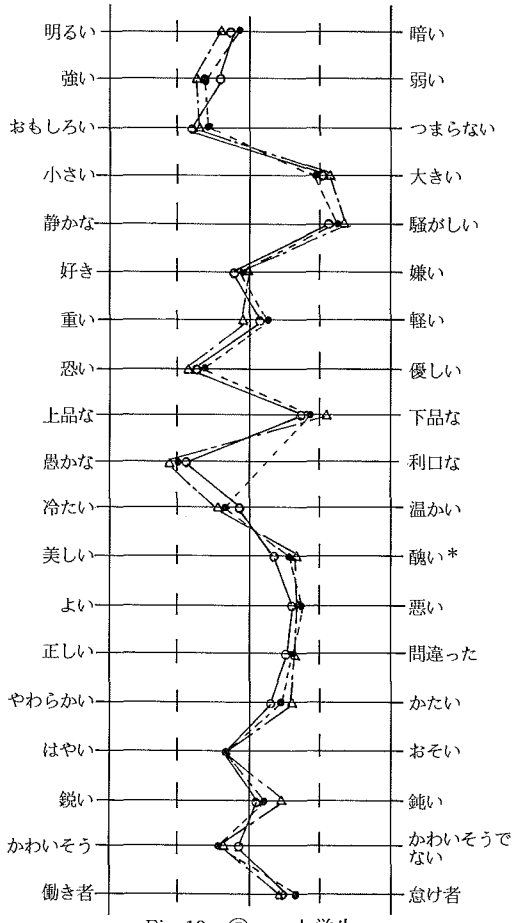


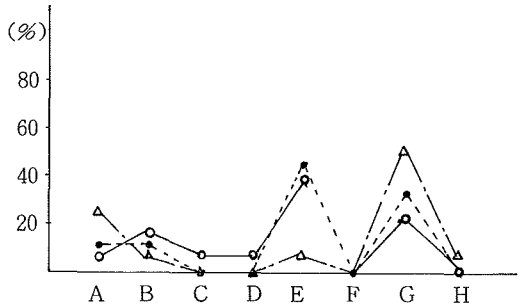
Fig. 13－⑦　－大学生－

3歳児で共通イメージは特に見られず，Ⅰ群「大きい，まちがった」Ⅱ群で強いイメージは見られず，Ⅲ群で「大きい，りこうでない，なまけ者」ととらえている。4歳児で共通イメージは「大きい，悪い，まちがった」であり，Ⅰ群「強い，きらい，なまけ者」Ⅱ群で「暗い，きらい，こわい，りこうでない」Ⅲ群「りこうでない」ととらえている。5歳児で「正しい－まちがっている」の尺度で5％水準で条件間に有意差が見られ，共通イメージは「暗い，大きい，きらい，こわい，りこうでない，無い，なまけ者」Ⅱ，Ⅲ群で「かわいそうでない」ととらえている。1年生で「好き－きらい」「よい－悪い」「働き者－怠け者」の各尺度で5％水準で有意差が見られ，共通イメージは「大きい，こわい，りこうでない，まちがった」でⅠ，Ⅱ群では「暗い，つまらない，かわいそうでない」ととらえている。3年生で共通イメージは「大きい，こわい，無い，まちがった」でありⅠ群「りこうでない，かわいそうでない，なまけ者」Ⅱ群で「きらい，りこうでない，かわいそうでない，なまけ者」Ⅲ群で「暗い，好き，やさしい，りこうな，よい，正しい，かわいそうな，働き者」ととらえている。5年生で

「働き者－なまけ者」の尺度で５％水準で条件間に有意差があり，共通イメージは「大きい，きらい，こわい，悪い，まちがった」でありⅠ群「りこうでない」Ⅱ群「かわいそうでない，なまけ者」Ⅲ群で「おもしろい，りこうでない，かわいそうでない」ととらえている。大学生で「美しい－醜い」の尺度で５％水準で条件間に有意差があり，共通イメージは「騒がしい」でⅠ群「大きい」Ⅱ群「大きい，下品な，愚かな」Ⅲ群で「愚かな」ととらえている。この事から各条件における話の影響をうけていて，二ひきのこぶたを食べた事から悪くみるか，三番目のこぶたに食べられた事に同情して良く見るかが年齢によって異なっている。

以上，登場者のイメージは各条件の話の影響を受け，大学生が最も残酷生の有無に敏感で共通イメージから年齢によっても登場者のイメージが異なると言える。したがって，仮説④は支持されたといえる。

Fig. 14－①～⑦に，感想(1)「おもしろかった場面」を示す。



A：おおかみが最後にやられたところ
B：こぶたがおおかみをだしぬくところ
C：こぶたがたるでころがったところ
D：ふうふうのふうというところ
E：全部
F：三びきが家を建てるところ
G：おもしろくなかった

Fig. 14－①　感想の各項目における割合
－３歳児－

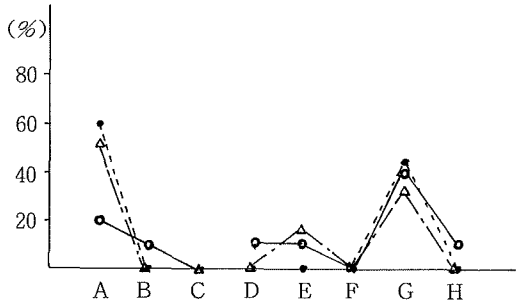


Fig. 14－②　－４歳児－

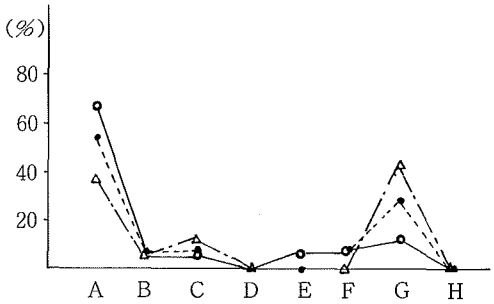


Fig. 14－③　－５歳児－

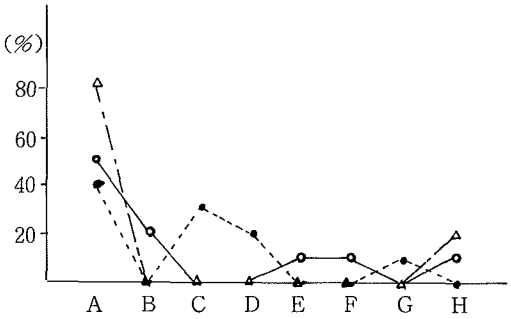


Fig. 14－④　－小　１－

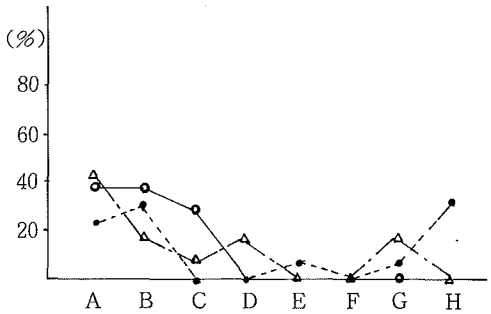


Fig. 14－⑤　－小　３－

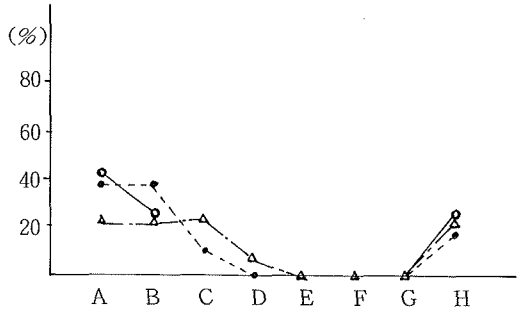


Fig. 14－⑥　－小　5－

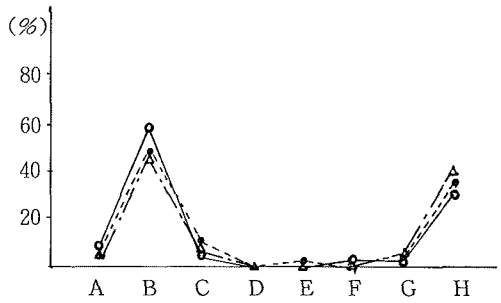


Fig. 14－⑦　－大学生－

年齢が高くなるほどおもしろくなかったと感じた者が増えている。1年生まではⅢ群をおもしろくなかったとする者はいないが，3年生からはⅢ群でおもしろくなかったとする者があらわれている。一番おもしろかった場面では，3歳児を除いて，1年生までは「おおかみが最後にやられたところ」とした者が最も多い。3年生，5年生は「おおかみが最後にやられたところ」と「三番目のこぶたがおおかみを出しぬくところ」が同じ位である。大学生では「こぶたがおおかみを出しぬくところ」が最も多い。条件別では各年齢に有意差は見られないが，1年生のⅡ群は「おおかみがやられたところ」に集中し，Ⅱ，Ⅲ群にはちらばりが見られる。3年生ではⅢ群がⅠ，Ⅱ群に比べておもしろくないと感じた者が多い。

Fig. 15－①～⑦に(2)「おおかみをどのようにしたいか」を示す。

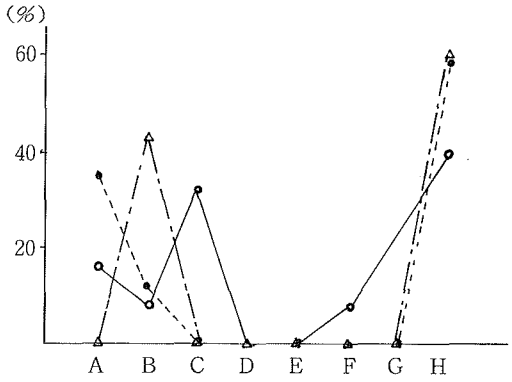


Fig. 15－①　感想②の各項目における割合
－3歳児－

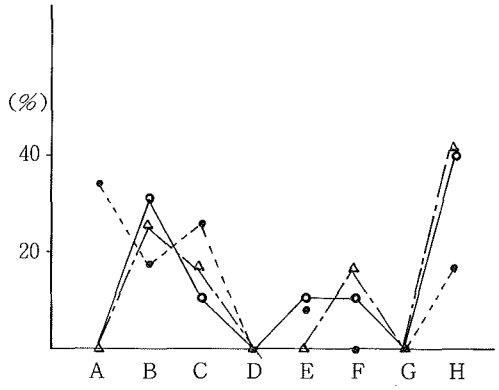


Fig. 15－②　－4歳児－

A：おおかみを食べる
B：おおかみを殺す
C：おおかみをやっつける（殺さない）
D：他のこぶたをやっつける（殺さない）
E：かかわらないようにする・逃げる
F：反省させて逃がす
G：仲直りする
H：その他・無答

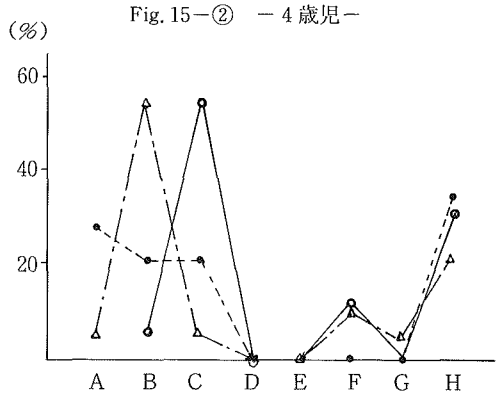


Fig. 15－③　－5歳児－

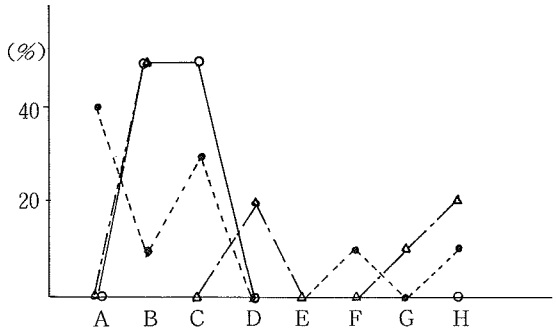


Fig. 15－④　－小　1－

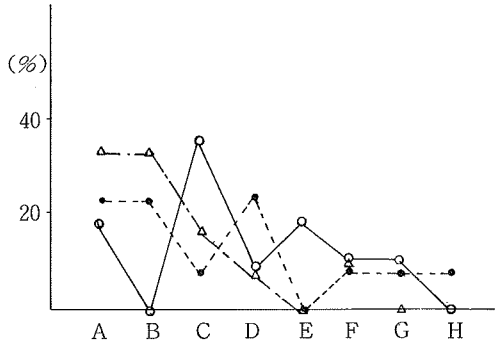


Fig. 15－⑤　－小　3－

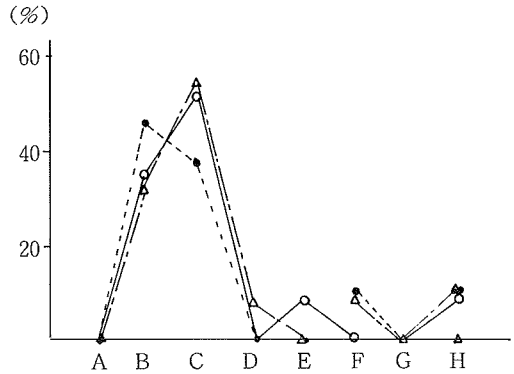


Fig. 15－⑥　－小　5－

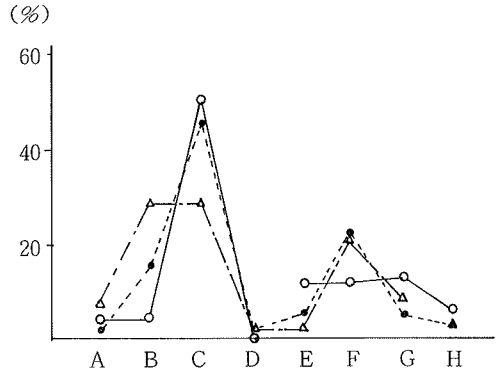


Fig. 15－⑦　－大学生－

1年生はⅠ群ではおおかみを「やっつけたい」Ⅱ群では「殺したい」Ⅲ群では「食べたい」に集中している。3・5歳児と1年生にそれぞれ5％，0.5％，1％水準で条件間に有意差が見られる。3年生は各群に「食べたい」としている者が見られ，他方，各群に「他のこぶたを助ける」とした者も多く見られる。5年生では「食べたい」とする者は一人も見られず，各群とも「殺したい」「やっつけたい」に集中している。大学生も「食べたい」とする者は少なく，Ⅰ，Ⅲ群では「やっつけたい」とする者が一番多く，Ⅱ，Ⅲ群で「反省させて逃がす」とした者がⅠ群よりも多い。

Fig. 16－①～④に(3)「知っていた話と比べての感想」を示す。

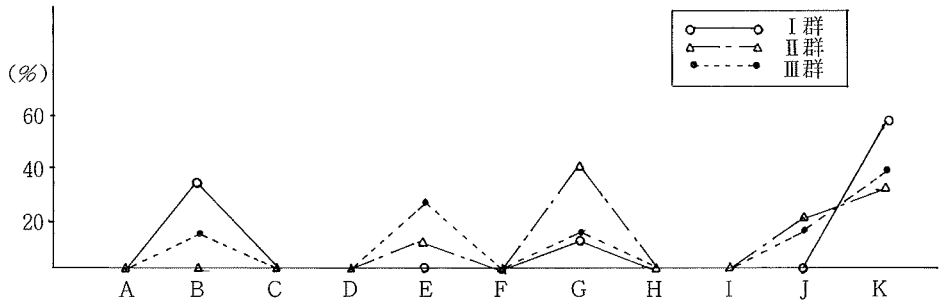


Fig. 16－①　感想(3)の各項目における割合　－小1－

A	残酷だった かわいそうだった	E	違　っ　て　い　た	I	三番目のこぶたがかしこい
B	こちらの方が面白くなかった・良くなかった	F	かぶ・りんご・たるの場面が違っていた	J	こちらの方が面白かった・良かった
C	三番目のこぶたがずるい	G	同じだった	K	その他・無答
D	おおかみやこぶたの最後が違っていた	H	忘れていた所を思い出した		

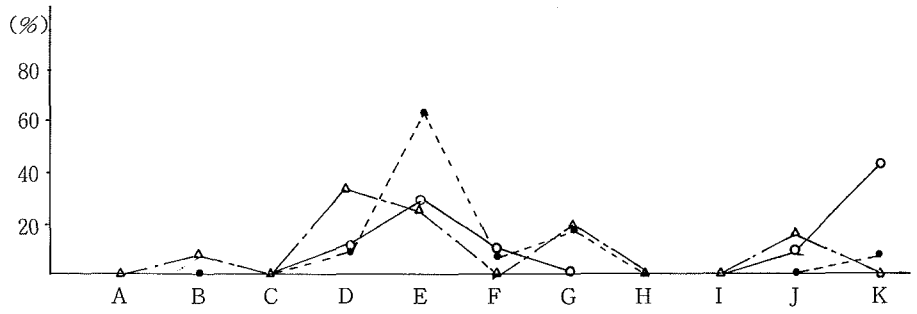


Fig. −② −小　3−

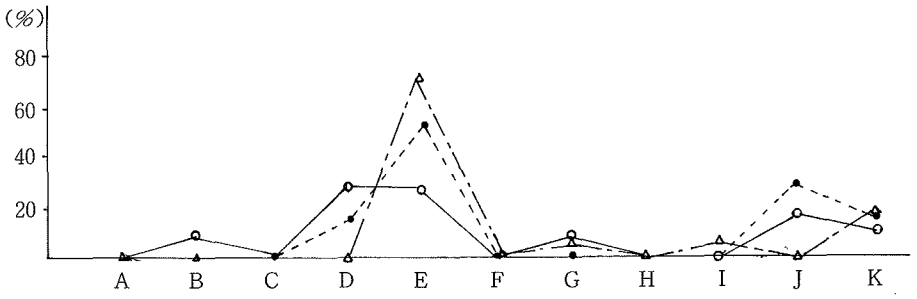


Fig. 16−③ −小　5−

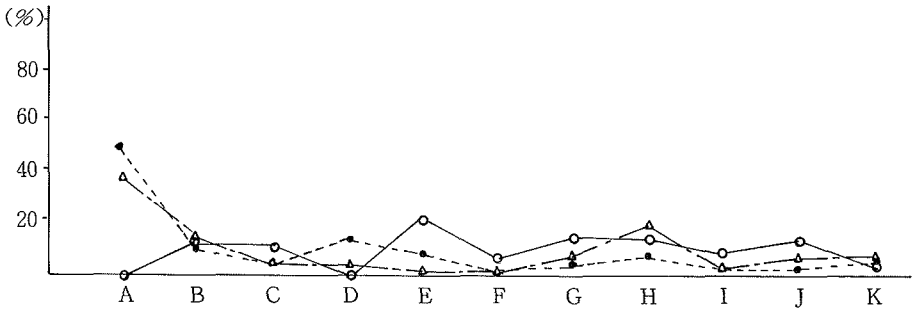


Fig. 16−④ −大学生−

1年生で条件間に有意差は認められないが，Ⅰ群は「おもしろくなかった」Ⅱ群は「同じだった」Ⅲ群は「違っていた」という感想が多く，既知の話と与えられた話を比較する事は難しかったようである。3年生と5年生は内容の違いに驚いた者が多い。3年生ではⅢ群で「違っていた」と思った者が多く，5年生では条件間に有意差は認められないが，Ⅱ群で「違っていた」と思った者が多い。大学生は条件間に0.5%水準で有意差が認められる。Ⅱ，Ⅲ群での「残酷だった」という感想から，「死ぬ，食べられる」場面にかなり抵抗を感じる。

Fig. 17－①～⑥に(4)「好きな登場者」を示す。

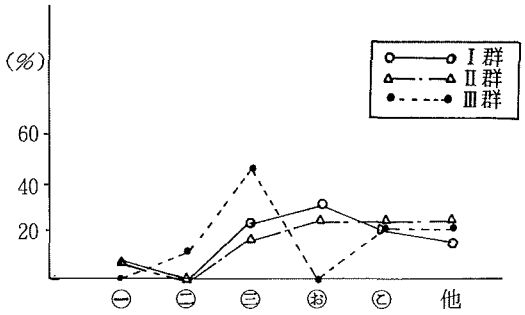


Fig. 17－① 感想(4)の各項目における割合 －3歳児－

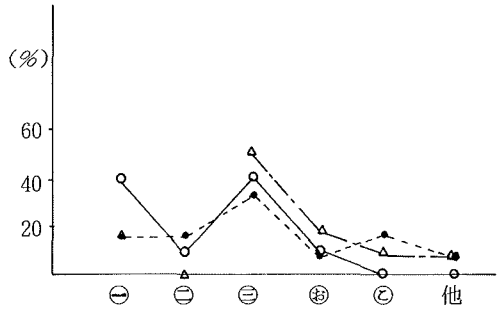


Fig. 17－② －4歳児－

一番目のこぶた	二番目のこぶた	三番目のこぶた	おおかみ	こぶた	その他

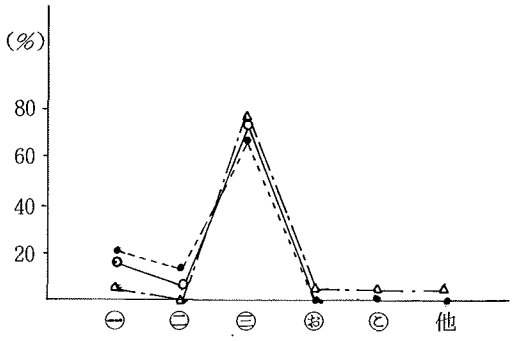


Fig. 17－③ －5歳児－

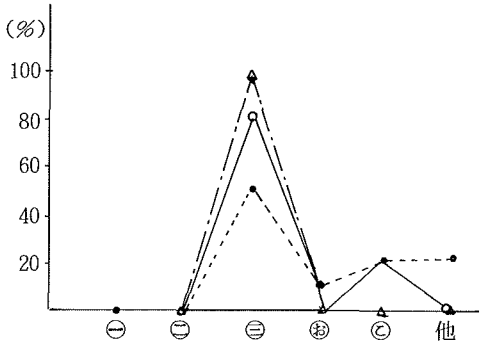


Fig. 17－④ －小 1－

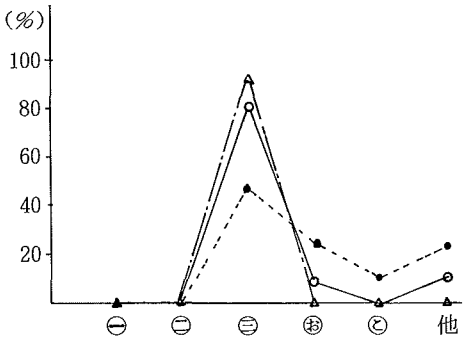


Fig. 17－⑤ －小 3－

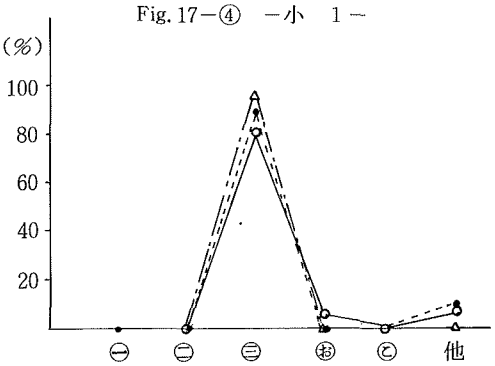
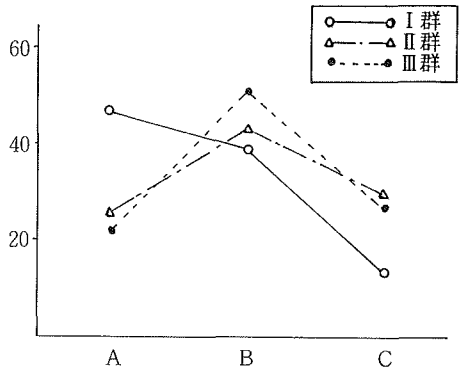


Fig. 17－⑥ －小 5－

3歳児は好きな登場者が「三びき」「こぶた」「おおかみ」というように一つに限定できず，印象に残った登場者を「好き」としている。4歳児はⅡ，Ⅲ群で「三番目のこぶた」が最も多く，5歳児と小学生で各条件とも「三番目のこぶた」に集中している。このことは最も善者を選んだと思われる。

Fig. 18に(5)「子どもに物語を与える事についての感想」を示す。



A	与え方がよい
B	どちらとも言えない
C	与えない方がよい

Fig. 18　感想の(5)の各項目における割合

条件間に2.5％水準で有意差が認められ，Ⅰ群では「与え方がよい」とした者が最も多く，その理由として「様々な教訓を与える事ができるから」だとしている者が多い。Ⅱ，Ⅲ群では「どちらとも言えない」が最も多いが，「死ぬ場面等，残酷な場面がなければよい」と考えている者が多く，残酷な場面に抵抗を感じる者が多い。「与え方がよい」とした者はⅢ群＜Ⅱ群＜Ⅰ群の順に多い。

以上，感想(2)の3，5歳児と1年生と大学生，感想(3)の大学生，感想(5)の大学生にそれぞれ条件間に有意差が認められる。幼児は残酷場面をそれほど気にしていないが，1，3年生の頃から少し気になり出し，5年生で抵抗を感じる者が見られ，大学生になるとかなり抵抗を感じる。したがって，仮説⑤は支持されたといえる。

Ⅴ　結　　論

理解テストにおいて高年齢ほど得点が高まっている。小学生はⅠ群よりⅡ，Ⅲ群の方が得点が高いのは知らない話であるⅡ，Ⅲ群の話の方が印象に残り易かったのかもしれない。幼児はⅢ群の方がⅠ，Ⅱ群より低かったのは「食べられる」という結末にあまり注目しなかったためであろう。

心情テストでは条件により内容の異なる場面においては条件間に有意差が認められ，残酷性の有無が登場者の心情理解に影響を与えている。幼児では条件間の差はほとんどみられず，3年生頃まではⅠ群で心情がとらえにくく，残酷性のある物語の方が明確に心情をとらえ易い。大学生では残酷性のある物語の方が心情をとらえにくくしているが，「死」にこだわったためだといえる。

登場者のイメージは残酷性の有無＋和らげ方の違いから年齢によってイメージが異なり，高

年齢ほど多面的にとらえている。大学生では残酷性に敏感に反応したため条件間の差が最も明確になっている。

感想面では幼児は物語を現実とはかけ離れた世界の事としてとらえることができることから，残酷行為にあまり抵抗を感じないが，１年，３年生の頃から少し気になり，５年生で抵抗を感じ，大学生ではかなり抵抗を感じている。そして，大学生はその話しを子どもに「与えない方がよい」「残酷な所が気になるために与えた方がよいとはいえない」とする者が多い。

以上，残酷性を含む原話の方が残酷性を和らげた改話よりも被験者に強い印象を与える。そして，残酷な場面に抵抗を感じるのは小学校高学年頃からで，大人になると残酷な場面にかなり抵抗を感じている。

参考文献

石上正夫　1986　父母と教師のための子育て読書をどうすすめるか　青木書店

水野陽一，飯田和也　1980　絵本に対する母及び子の反応に対する研究　第一報―内容の違う同タイトルの絵本を通して―　保育学会33回大会

水野陽一，飯田和也　１９８０　絵本に対する母及び子の反応に対する研究，第二報―ある絵本における反社会的な行為を中心に―保育学会34回大会

佐藤公代　1986　思考の発達に関する研究―文章の相違による物語の理解やイメージの比較について―愛媛大学教育学部紀要　第Ⅰ部　教育科学　第32巻　21－45

佐藤公代　1987　絵本の挿絵の役割に関する研究　愛媛大学教育学部紀要　第Ⅰ部　教育科学　第33巻　75－93

滝沢武久　1984　国語教材の心理学的検討―(1)民話に対する児童の反応―　日本教育心理学会第26回総会

謝　辞

本研究の実験にあたり，愛媛大学教育学部学生，松尾香代子氏と教育心理学専修生３，４回生，さらに，愛媛大学教育学部付属小学校の遠山順一校長先生はじめ諸先生方と被験者の児童，愛媛幼稚園の園長先生及び諸先生方と被験者の幼児と被験者の愛媛大学の学生（順不同）に多大な協力をえたことに対し，謝意を申し上げます。